

考えられる。土器以外では石鏝が1点出土している。

13-G区で検出されたSK 09からも弥生時代中期の壺が出土した。埋土からは木の実が出土している。形状は平面形が円形である。

その他の土坑については5-I・J区、15-E区に集中するが、まとまって遺物の出土したものは無く、形状は楕円形のものや、不定型なものなどである。土坑からは遺物が出土しなかったため、時期の判定は困難であるが、埋土の様子や検出状況から判断すると、上記SK 03やSK 09と同一時期のものと考えて良いと思われる。

SK 10は土坑内より多くの炭化材や焼土が出土した。土器の出土は無く、他の土坑とは異なり近世以降の焚き火の跡と思われる。

検出した土坑の規模等については以下のとおりである。

土坑番号	地区	長 径	短 径	深 さ	形 状	出 土 遺 物
SK 01	12G	2.06m	0.68m	0.28m	不定型	弥生中期土器
SK 02	12G	(2.28m)	2.00m	0.16m	楕円形	弥生中期土器、サヌカイト
SK 03	15E	1.84m	1.24m	0.35m	楕円形	弥生中期土器、石鏝
SK 04	15E	1.88m	1.28m	0.15m	楕円形	弥生中期土器、サヌカイト
SK 05	15F	1.58m	0.94m	0.10m	楕円形	
SK 06	6 K	1.12m	0.66m	0.12m	楕円形	
SK 07	7 H	(1.30m)	1.40m	0.08m	楕円形	
SK 08	6 H	(0.74m)	0.92m	0.10m	楕円形	
SK 09	13G	0.46m	0.40m	0.12m	円形	弥生中期土器
SK 10	6 J	2.38m	1.52m	0.18m	楕円形	炭化材、焼土
SK 11	6 J	0.84m	0.44m	0.06m	楕円形	
SK 12	5 J	1.80m	0.90m	0.14m	長楕円	
SK 13	5 J	(0.68m)	0.98m	0.06m	楕円形	
SK 14	6 J	0.70m	0.40m	0.10m	楕円形	
SK 15	5 I	4.70m	1.48m	0.11m	不定型	弥生中期土器
SK 16	5 I	2.02m	0.68m	0.30m	楕円形	弥生中期土器
SK 17	6 J	(0.36m)	1.04m	0.16m	円形	
SK 18	9 I	(2.34m)	0.66m	0.19m	不定型	炭化物、焼土
SK 19	5 I	(0.76m)	1.00m	0.28m	円形	
SK 20	6 J	(4.40m)	2.58m	0.12m	不定型	弥生中期土器
SK 21	1 K	(1.58m)	1.24m	0.51m	楕円形	弥生中期土器
SK 22	11G	5.52m	(1.08m)	0.13m	不定型	
SK 23	11G	(3.12m)	(0.80m)	0.11m	不定型	
SK 24	10H	1.58m	(1.08m)	0.20m	円形	
SK 25	9 H	(1.36m)	1.34m	0.13m	楕円形	
SK 26	7 H	0.86m	0.72m	0.25m	円形	
SK 27	6 J	1.46m	0.88m	0.09m	楕円形	

SK 28	1 L	(1.00m)	0.92m	0.27m	楕円形	
SK 29	12 G	0.70m	0.46m	0.21m	楕円形	
SK 30	12 G	(0.56m)	0.78m	0.23m	楕円形	
SK 31	6 I	0.82m	(0.40m)	0.09m	楕円形	
SK 32	6 I	3.34m	0.76m	0.25m	不定型	
SK 33	6 I	1.14m	0.48m	0.10m	不定型	

〔 () 内数字は調査区内で確認できた規模 〕

溝 溝は8条検出できたが、いずれも出土遺物が無く、時期判定は困難であるが、弥生時代中期に収まるものであろうと思われる。規模は以下のとおりである。

溝番号	地区	検出長	幅	深さ	溝番号	地区	検出長	幅	深さ
SD 01	7 K	1.38m	1.14m	0.12m	SD 05	6 J	1.60m	0.42m	0.16m
SD 02	6 K	1.44m	0.28m	0.14m	SD 06	6 J	3.10m	0.96m	0.15m
SD 03	6 H	2.88m	0.70m	0.14m	SD 07	7 H	1.12m	0.22m	0.19m
SD 04	1 L	1.48m	1.38m	0.15m	SD 08	9 I	1.54m	0.38m	0.12m

ビット ビットは尾根上のトレンチで検出された。特に15-E区で集中して検出された。柱が通るものも検出されているが、調査区の制限から、建物跡等を確認することは出来なかった。9-I区、12-G区で検出されたビット2基からは弥生時代の遺物が出土した。

住居址 住居址は試掘調査時に判明していたものも含めて、今回5棟を検出したが、その規模と位置関係を記録するのに留め、保存した。

出土遺物 出土遺物では弥生土器のほか、5-K区で大型石庖丁、1-K区のSB 05のすぐ近くから大型鋸刃石斧が遺構面而出土した。石鏃は全部で5点出土している。また、SB 03・05の検出面で鉄製品が出土している。



fig. 107 遺跡付近空中写真



fig. 108 遺構検出状況空中写真

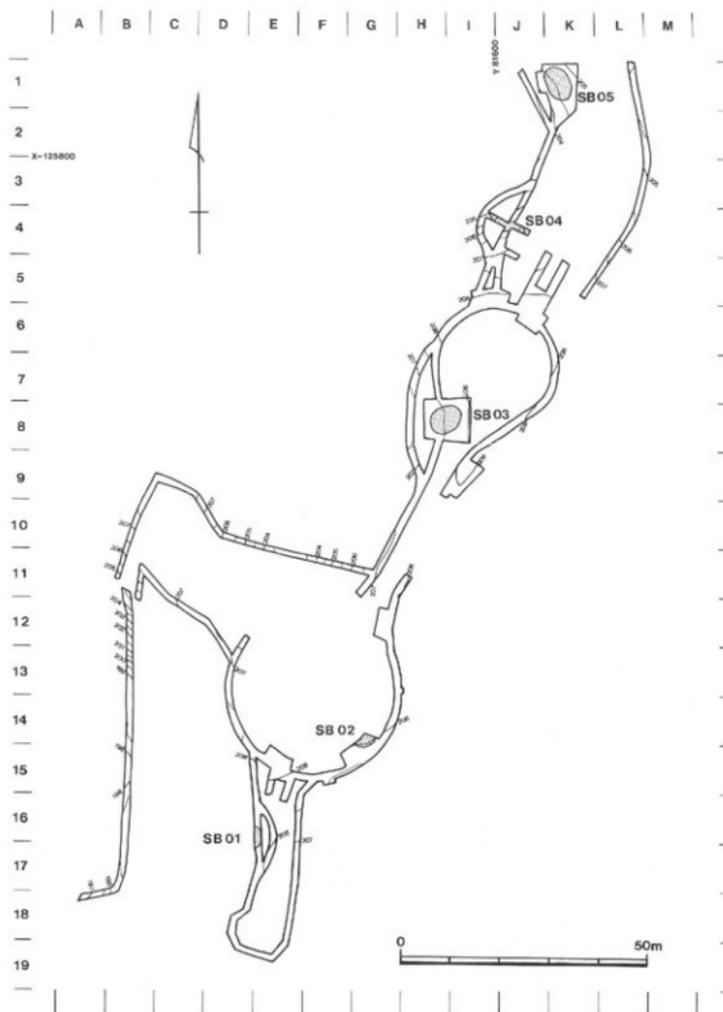


fig. 109 調査区全体図

3. まとめ
- 今回の調査は公園整備に伴う擁壁等で文化財に影響の及ぶ範囲についての調査であったため、遺跡の全容を把握するには困難である。しかし、これまでの全面調査や試掘調査の結果を辿る遺構が検出でき、大規模な高地性集落のあったことをあらためて示すものとなった。また、公園として保存される尾根上には、試掘調査の結果からも、まだ、多くの弥生時代の住居等の遺構が存在するものと考えられる。

かみおなだ
18. 上小名田遺跡 第10次調査

1. はじめに 上小名田遺跡は、昭和61年度の六甲北有料道路建設工事に伴う試掘調査によって発見された。特に昭和62・63年の調査では掘立柱建物群等が検出されるなどし、10世紀中葉から12世紀にわたる当地域の中心的集落として位置づけられている。
- 今回の調査は県営団場整備事業に伴う発掘調査であり、調査は工事対象範囲内に限定して実施した。工事予定地のうち約500㎡について調査を行い、調査順に地区名をⅠ～Ⅵ区とし、調査区毎に遺構名を付した。



fig. 110
調査地点位置図
1 : 2500

2. 調査の概要 近・現代の耕土とその床土が二度にわたって盛られており、その下層に中世の土器片をわずかに含む粘土層が堆積している。遺構面はその直下の黄灰色粘土層を基盤とし、Ⅰ区で幅50cm、深さ15cmの溝 (SD 01) 1条を、Ⅲ区で幅1m、深さ30cm (SD 02) と幅1.5m、深さ30cmの溝 (SD 03) を2条、およびピット1か所を検出した。これらの遺構からは遺物は出土せず、明確な時期は不明である。またⅡ区では遺構は検出されず、調査区の東半の土層は河川状の堆積を示しているが、現在当地区の東隣を流れる河川の改修以前の堆積と思われる。
- Ⅳ区 Ⅳ区では、現在の耕土および床土の直下で遺物包含層及び遺構面を検出した。検出した遺構は、掘立柱建物3棟、土坑1基、溝1条、近代の河川と、ピットである。
- 掘立柱建物 調査区の中央、Ⅳ-2区で方向を異にする4棟以上の掘立柱建物を確認した。西側の4間×1間以上のものをSB 01、中央北側の1間×2間以上のものをSB 02とし、東側の1間×1間以上の建物をSB 03、SB 03と軸をほぼ同じにする中央南側の1間×1間のものをSB 04とする。

- SB 01 4間(11.5 m)×1間(2.4 m)以上で、東西方向に長い建物である。
- SB 02 1間(3.0 m)×2間(3.7 m)以上で、やや東にふれて南北方向に建てられたと考えられる。
- SB 03 1間(2.4 m)×1間(2.2 m)以上で、ほぼ真北方向の建物である。
- SB 04 2間(5.0 m)×1間(2.5 m)以上の建物で、SB 03と軸方向をほぼ同じにする。
- 土 坑 東側を攪乱によって切られているが、一辺が1.4 m、深さ15cmの方形の土坑(SK 01)と考えられる。
- 溝 幅10cm、深さ5 cmの溝(SD 01)で、遺物は出土しなかった。
- ピット 上記の掘立柱建物の他、柱穴と思われるものを含むピットを28か所確認した。先の4棟以外の掘立柱建物が存在すると思われるが、調査範囲が限られていたため、ピット相互の関係は明らかでない。

V 区 ピット5か所、土坑1基、溝1条を検出した。これらのピットは断ち割りによる断面観察では柱穴と考えられるが、配置は不規則で、詳細な性格は不明である。土坑(SK 01)は、調査区内で確認し得た限りでは深さ50cmで、一辺1 mの不整形とされる。この土坑は埋土中に多量の炭を含み、底には焼土が二層にわたって堆積していたが、遺物は出土せず、その性格を特定するに至らなかった。

V区で検出した溝(SD 01)は、幅2.3 m、深さは10cmと浅く、現耕土直下で検出された。

VI 区 VI区では、河道1条を検出した。

河道 幅15m、深さ1 mの河道で、北岸の埋土上層から11~12世紀の須志器や土師器がまとまって出土し、埋没した時期がうかがえる。また、最下層から板材、盤状木製品などが出土した。

3. まとめ

今回の調査では、掘立柱建物や河川跡をはじめ、過去の集落景観を復元するための資料を得ることが出来た。掘立柱建物から、厳密な遺構の時期を示す遺物が出土しなかったものの、埋土中の遺物を見るかぎりVI区の河川同様11~12世紀の上器が混在しており、その時期を大きくはずれるものではないと思われる。上小名田遺跡では、六甲北有料道路建設に伴う調査に際して平安時代末から鎌倉時代に至る集落址の一部を確認しており、今回の調査結果は集落址の範囲を知る一助となるであろう。

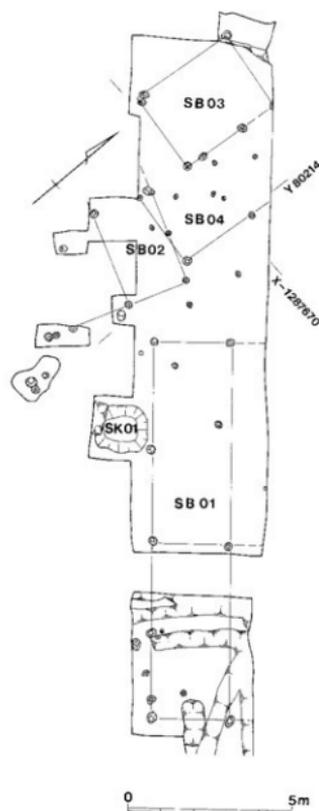


fig. 111 遺構平面図

- SK 07 径約70cmの土坑であるが、西半は溝により削られている。径20cm程の円礫を詰めているが、いずれの礫も火を受けた痕跡が確認される。土器片が僅かながら確認されている。
- SX 01～03 いずれも白色の粘土を埋土とする不定形の落ち込みである。水みちと考えられる。
- SX 04 灰茶色砂質土を埋土とする落ち込みで、屏風川に向けて緩やかに傾斜している。埋土中に中世の土器が多く含まれるほか、焼土塊も多く混じっている。
- ピット 検出したのはいずれも深さ15cm以下の浅いものであるが、SX 04 内のものは柱間約2mで南北2間分を検出した。柱間には東柱が存在したと考えられる浅い窪みがある。また、東壁でも1基確認しており、南北2間以上×東西1間以上の掘立柱建物と思われる。

II 区 幅60～80cm、深さ約20cmで長さ2mを検出した。側面に扁平な石を貼り、一部上石が覆

SD 01 存していた。埋土は暗灰色の細砂～極細砂である。中から陶器片が1点出土している。

SP 01 径約50cm、深さ30cmのピットで、土師器の皿が9個体分出土した。土師器の皿は2枚ずつが合わさるように出土しており、口縁部を合わせて掘っていた可能性がある。また、一部口縁部に灯心の痕跡を残すものがある。

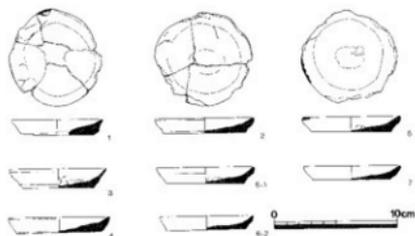


fig. 113 SP 01出土土器実測図

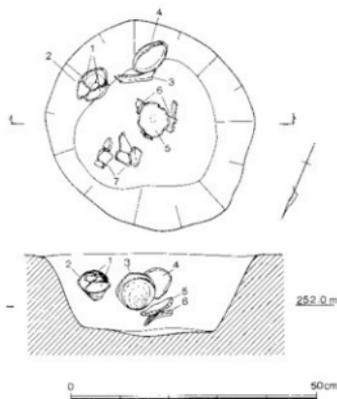


fig. 114 SP 01平・断面図

ピット いずれも径約20cmで、深さは10cm程である。炭化物が少量混じっていた。

遺物 遺物は、大部分が整地層と考えられる灰茶色細砂土に含まれており、各遺構埋土に小片が若干含まれる程度である。詳細な時期は不明であるが、13～14世紀代のものと考えられる。また、I区北側の圃場で検出したSK 01から出土した陶器碗片と、丹波焼の壺口縁片は16世紀代のものと考えられ、平成2年度に調査された遺構群とほぼ同時期のものである。その他、特に火熱を帯びた粘土塊が多く認められ、小鍛冶あるいは土器焼成等の生産活動が行われていた可能性がある。

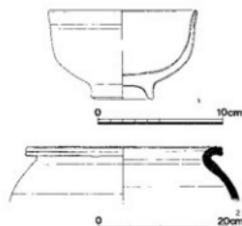


fig. 115 SK 01出土土器

3. まとめ

今回の調査では、中世末から近世にかけての遺物・遺構が確認され、段丘上に遺構が展開していることが判明した。三木街道沿いという立地状況や、検出された遺構の時期等から、秀吉の三木攻め期前後の付近の状況を考える上で重要な遺跡である。

20. 戎町遺跡 第9次調査

1. はじめに

当遺跡は、昭和62年に戎町3丁目の試掘調査で弥生時代中期の土器を含む遺物包含層が発見されたことにより「戎町遺跡」と命名された。第1次調査では、弥生時代前期～中期の遺構・遺物など良好な資料が得られた。特に弥生時代前期後半以前の水田址が発見され注目された。その後の8次にわたる発掘調査により縄文時代晩期から中世におよぶ遺物、遺構が確認されている。

今回の調査は戎町遺跡の第9次調査にあたり、立体駐車場建設に伴い実施した。



fig. 116
調査地点位置図
1:2500

2. 調査の概要

調査地は、弥生時代前期の水田址が発見された第1次調査地の北東約200mに位置する。今回の調査では、弥生時代前期～中世の5面の遺構面が確認され、河道、土坑、ピットなどが検出された。

第1遺構面

近・現代と考えられる水田の田耕土・床上下に暗灰褐色砂質土の古墳時代と中世の遺物を包含する層があり、その下層の6層（淡灰褐色極細砂）上面が第1遺構面である。

第1遺構面の西半は、現代の建物基礎など、上層の擾乱がおよんでいたが、東半部で溝2条が検出された。SD 01は幅80～120cm、深さ5～10cm、SD 02は幅20cm、深さ5cm内の、いずれも浅い溝で、東西方向にほぼ直線にのびている。溝内の埋土からは、須恵器、土師器の小片が僅かに出土しており、遺構の時期は中世と考えられる。

第2遺構面

7層の灰色粘質土上面において、調査地のほぼ全面で、獣足痕が検出された。7層はそ

の土壌から水田面と考えられる。当遺構面およびその直上層からは遺物が出土しなかったため、時期は不明であるが、おそらく中世であろう。

第3遺構面

第3遺構面は8層の黒褐色粘質土上面が本来の面と考えられるが、8層では遺構が不明瞭であったため9層上面において検出をおこなった。第3遺構面では、土坑状の落ち込み・ピットが検出された。SX 301は楕円形の落ち込みで、長さ2.4m、深さ15cmで、人為的に掘削されたものかは疑問である。ピットは42カ所検出されたが、不定形のものも多く、建物の柱跡と確認できるものはない。SX 301からは弥生時代中期の土器片が出土しているが、8層が弥生時代中期の土器を中心とする包含層であることや、周辺地の調査状況から、これらの遺構の時期は弥生時代中期以降、庄内あるいは布留期の可能性が考えられる。

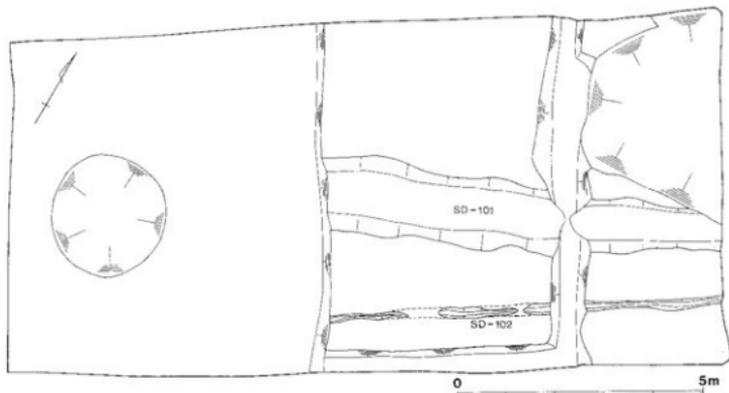


fig. 117 第3遺構面平面図

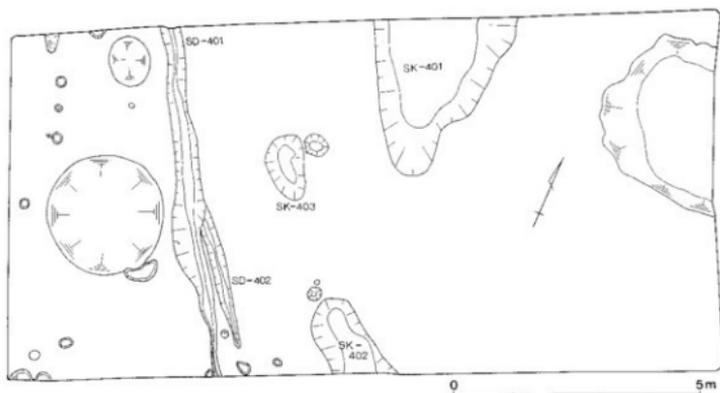


fig. 118 第4-1遺構面平面図

第4遺構面

10層上面が遺構面で、調査地西半部は淡黄褐色シルトがベースであったが、東半部は灰褐色極細砂がベースとなっており、自然流路（河道）が埋没した後に遺構が存在している。

この遺構面では、土坑3基、溝2条、ピットを検出した。SK 401は幅3.0m、長さ3m以上、深さ15cmの不定形な土坑である。SK 402は幅1.0m、長さ2m以上、深さ約15cmである。SK 403は不整形円形で幅0.8m、長さ1.3m、深さ約20cmの土坑である。SD 401・402は北西—南東方向の溝で、SD 401がSD 402を切っている。SD 401は幅20~50cm、深さ約10cm、SD 402は幅20cm、深さ7cm内で南側では浅くなり途切れている。これらの遺構からは弥生時代中期（Ⅲ様式）の土器が出土しており、当遺構面はその時期に属すると考えられる。

河道

第4遺構面の東半部において検出され、SK 401~403などはこの河道埋没後の遺構である。調査地内においては、河道の西側の肩部が検出され、東側の肩部は調査地外と考えられる。調査は工事影響深度までのため、この河道の底部まで全面に検出することはできなかったが、中央部東西のトレンチ調査により、深さは約1.5mであることが確認できた。河道埋没土の上層には弥生時代中期の土器が含まれるが、中位以下の砂礫層には、弥生時代前期後半の土器が多く含まれていた。

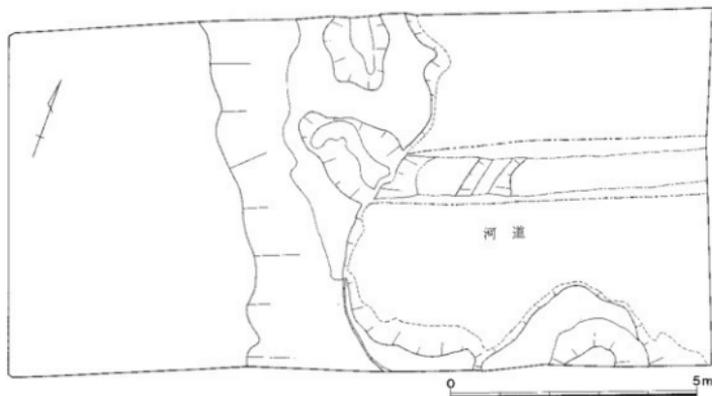


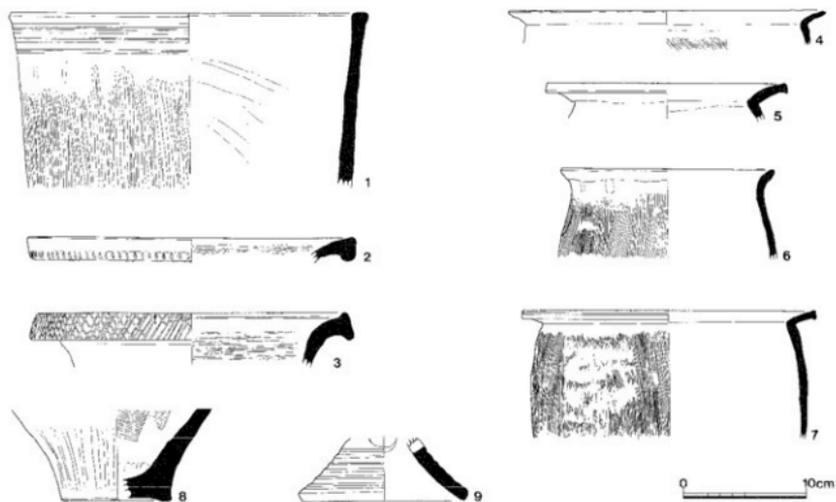
fig. 119 第4-2遺構面平面図

第5遺構面

第4遺構面下に水田土壌と思われる黒灰色粘質土層（12層）が見られ、12層および13層上面の調査を行ったが、遺構は確認されなかった。今回の調査では、掘削深度の制約もあったため、調査地中央部に東西方向のトレンチを設定してさらに下層の試掘を行ったが、掘削範囲内においては、弥生時代以前の遺構、遺物は確認できなかった。

3. まとめ

今回の調査地においては、住居址などの集落に直接関係する遺構は検出されなかったが、弥生時代中期を中心とする遺物包含層の存在や、弥生時代前期後半から中期にかけての土器が多く出土した河道が検出されるなど、近辺に集落址の存在を窺わせるに十分な資料が得られた。



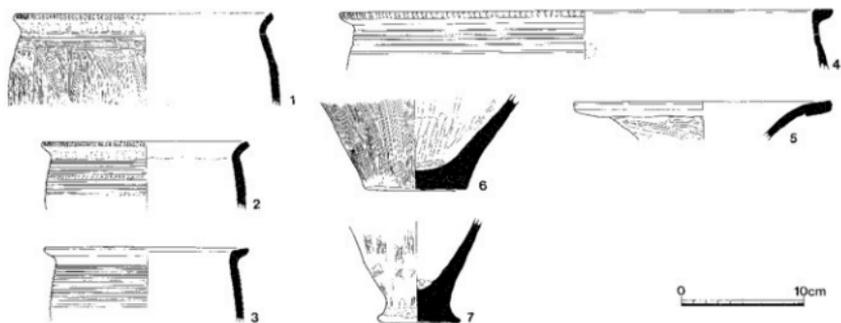
0 10cm

fig. 120 8層出土土器実測図



0 10cm

fig. 121 9層出土土器実測図



0 10cm

fig. 122 河道出土土器実測図

21. 垂水・日向遺跡 第7・8次調査

1. はじめに

当遺跡は福田川右岸の河口近くの沖積地に立地する。西方約1kmには県下最大の前方後円墳である五色塚古墳が存在する。

当遺跡が昭和63年度、垂水駅前再開発事業に伴い確認されるまでは、福田川流域では遺跡の存在は全く知られていなかった。昭和63年度に第1次発掘調査が実施されて以来、今回の調査で第7・8次を数える。

これまでの調査で、縄文時代前期以前の人の足跡、縄文時代中期～晩期の洪水堆積とそれに伴う流木、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居、古墳時代前期の土坑、平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物群などが確認されている。



fig. 123
調査地点位置図
1 : 2500

2. 調査の概要

これまでの調査では、当遺跡は2～3面の遺構面が確認されている。灰褐色シルト層を基盤層とし、平安時代の掘立柱建物群を中心とする遺構、その基盤層の下の縄文時代の洪水跡、更にその下の縄文人の足跡などである。

竪穴住居

T. P. 4.0～4.5 mで検出したもので、これまでも第5次調査でその一部が知られていた。いずれも方形で、庄内併行期に属する (fig. 126)。

掘立柱建物

竪穴住居と同一面で掘立柱建物及び橋、井戸などが出土している。これらの建物は、その柱穴の規模・形態から二時期に分類できる。掘形が方形ないしは長方形のものは平安時代後半に (fig. 125)、円形の場合は平安時代末から鎌倉時代に属する (fig. 124)。

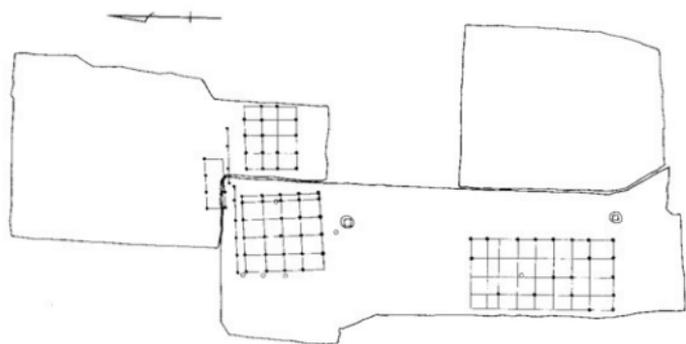


fig. 124 鎌倉時代盛立柱建物

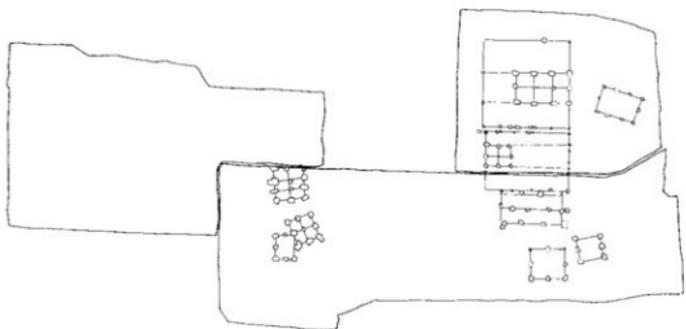


fig. 125 平安時代盛立柱建物

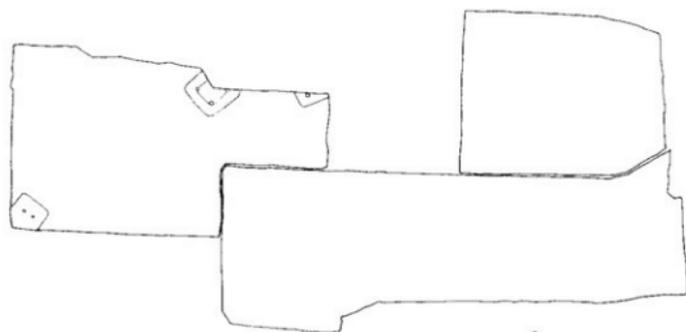


fig. 126 庄内并行間敷穴生厩

0 20m

井戸 掘立柱建物の新しい時期に対応するもので、2基出土した。いずれも井戸枠は板材を組み合わせたもので、底には曲物をいれ水溜めとしている。この井戸は、出土遺物等から築造時、廃棄時に祭祀を行ったようである。

地鎮遺構 掘立柱建物に付随し6基の地鎮遺構が出土している。ピット内に甕の底部を置き、その中に赤い小礫を詰め、その上に大皿2枚を重ねたものやピット内に白色や黒(青)色の小礫を詰めたものである。掘立柱建物建築時の祭祀と考えられる。

洪水 調査区全域にわたり、細砂～礫層が厚さ1.0～2.0m程度堆積していた。この堆積中には多量の木材化石や大型植物化石、そして縄文土器が含まれていた。

土器 土器の出土は砂礫層として一括してはいるものの、砂層にはほとんど含まれず、礫層に大部分が含まれる。総数400点程度の出土であり、調査面積に比し少ない。全て縄文土器であり、最も古いものは中期前葉の船元I式で、最も新しいものは後期末葉の宮滝式である。量的に多くを占めるのは、後期中葉の北白川上層式である。この時期差が堆積順序に対応するものかどうかは、今後の整理で明らかにしていきたい。

木材化石 調査区のほぼ全域に分布し、その形態は、大部分が1～数mの破片になったものであるが、中には根株から先端に至るものや、小枝が欠けずに付いていたりするものがあり、ごく近くから流出したものと考えられる。環境復原に必要な樹種同定のために約7,000点をサンプリングし、同定を行った。

大型植物化石 主として木の葉であるが、細砂層中に厚さ3～5cmで堆積したもので、ほぼ全域に存在した。全てをサンプリングするのは量的に困難であり、残存状態の良好な部分をサンプリングし、同定を行った。



fig. 127 井戸



fig. 128 木材化石出土状況

火山灰

縄文時代の洪水によって削り残された部分で火山灰の堆積を検出した。この火山灰は第3次調査でも検出しており、同定の結果、鬼界カルデラから噴出したアカホヤ火山灰と確認されたものである。この堆積は約40cmの厚さで、大きく3～4層に分層でき、最も下の層位の上面に漣痕（さざなみの跡）を確認することができた。この漣痕は東西方向に溝状になるもので、南北方向の波によって形成されたことが判る。断面観察を詳細に行くと漣痕頂部の北側に細かな堆積物が認められたため、南から北への波によって形成されたことが判明した。

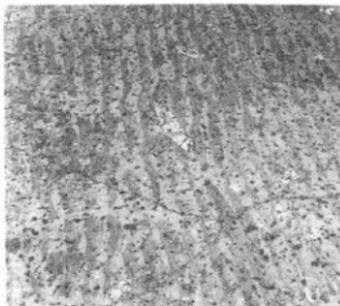


fig. 129 火山灰層中の漣痕

下層流路

第1次調査では流路の下層でヒトの足跡を検出している。その層位に至るまでに東西方向の流路を確認した。流路中には流木が多量で、約500点をサンプリングした。

この層位からは土器は出土しなかったものの、前後関係から縄文時代早期に属するものと考えられる。



fig. 130 ヒトの足跡

足跡

更に下層のT. P. 0.5 m前後でヒトの足跡を検出した。ヒトの足跡は、調査可能な範囲

全域に認められた。大部分は北から南へ、あるいはその逆方向をたどるものである。足跡の認められる土層は干潟と考えられ、5mm前後の薄いシルトが繰り返し堆積している。

3. まとめ

今回の調査では平安時代の掘立柱建物群、井戸、地鎮遺構などを検出した。当地は、東大寺領「垂水荘」として知られているところであり、それとの関連が予想される。

6基の地鎮遺構のうち5基は、色を揃えた小礫をビット内に入れるもので、今日までほとんど知られていない形態のものである。

鎌倉時代における密教の地鎮法を記した「覚禪鈔」によると、東に青玉、南に赤玉、西に白玉、北に黒玉、中央に黄玉を埋めるとあり、それとの関連が想定される。

下層の縄文時代形成された層位において検出したものは、後期の洪水による砂礫層の堆積とそれに伴う流木群・大型植物化石群。6300年B. P. に鬼界カルデラから噴出したアカホヤ火山灰の堆積。アカホヤ火山灰層中で検出した漣痕（さざなみの跡）。早期の流路と砂礫の堆積。それに伴う流木・立木。早期のヒトの足跡とその層位における漣痕である。これらの豊富な成果を、今後各方面から解析することによって、当地域の縄文時代早期～後期における景観復元が、より一層詳細になされることは明らかである。また、縄文海進についても、アカホヤ火山灰層を鍵層とし、漣痕の存在やその前後の土層堆積状況から、海水の上昇を明確に説明することができるであろう。

22. 垂水・日向遺跡 天ノ下地区

1. はじめに 当遺跡は、海岸部に山が迫り、福岡川と天神川に挟まれた東西に細長い平野部に位置している。当遺跡周辺は、戦后市街地化が早く進んだため、埋蔵文化財の分布状況は不明であった。昭和62年度に実施した再開発事業に伴う試掘調査によって、遺跡の存在がはじめて明らかになった。

今年度の調査は、商大線道路拡幅工事に伴い実施したもので、垂水日向遺跡の西端部、天神川沿の地点である。調査は現道に接し、幅約5～8mの道路拡幅部を、交差点部分を除く長さ約80mの範囲で実施した。



fig. 131
調査地点位置図
1 : 2500

2. 調査の概要 基本的な層序は、現地表下の盛土、近代の耕作土、床土、灰色粘土層（中世耕土）、暗灰色粘質土（古墳時代遺物包含層）、黄色粘土層（古墳時代遺構面）となる。
- A 区 最も北側の約5m×14mのトレンチで、多くの部分は近代の家屋基礎と中世の河道によって遺構面が失われていた。
- 中世の河道はトレンチ北東隅から南西方向にやや蛇行しながら流れている。河道内の堆積は、拳大程度の礫の混じる砂礫層で、流れが早かったものと推定されるが、多くが現道下にあるため規模などの詳細は不明である。
- 遺構としては流路に削られた地表面から埋壺を検出した。この遺構は13世紀頃の束播系須恵器の甕を、口を上に向けた正位の状態に埋めたもので、底部付近には1cmほどの穿孔が3ヵ所認められた。壺形は甕に接していたのか、調査時には確認できなかった。
- B 区 このトレンチは約8m×20mで、北側部分では現地地表直下に遺構が密集していた。トレ

ンチ北端から約8mで南側に緩やかに傾斜しており、遺構が希薄となっている。西側部分は近世以降の河道により削られていた。

このトレンチで検出した遺構は、掘立柱建物1棟（SB01）と竪穴住居2棟（SB02・03）である。

SB01は南北2間以上の建物と推定される以外、多くがトレンチの外にあるため不明である。柱間2.1mで出土した遺物から11世紀後半頃のものと考えられる。

SB02は隅丸方形の一辺約4.0mの竪穴住居である。西半部が近世の河道により削り取られている。周壁溝は不明確であるとともに、柱穴は発見されたが、組み合わせが不明である。遺物は床面より約10cmほど離れて、土師器甕と高杯が出土した。築造時期は出土遺物から4世紀末から5世紀初頭と考えられる。

SB03はSB02に切られた状態で検出された。西半部はSB02同様に近世の河道で削り取られている。平面形は隅丸方形で周壁溝をもつ。規模は、SB02に切られているため不明な点もあるが、4本柱の建物と考えられ、柱の間隔から一辺約4.2mほどと推定される。遺物は床面より約10cmほど離れて、土師器高杯と結晶片岩の板石が出土した。築造時期は出土遺物から4世紀末から5世紀初頭と考えられる。

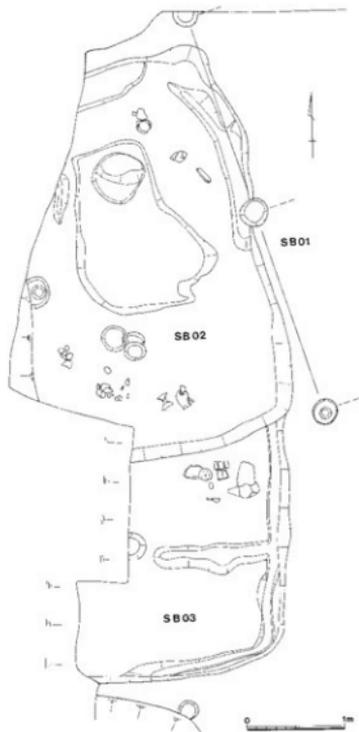


fig. 132 B区古墳時代住居址平面図

C 区

Bトレンチの南側に続く8m×30mのトレンチである。西側約2mは近世の河道で失われている。この河道内より円筒埴輪片1点が近世の陶器に混じり出土した。このトレンチの北半部はBトレンチの南半部同様で、遺構面はなく、包含層より僅かに小片の土器が出土した程度である。

南半部は、古墳時代包含層の上面で柱穴を検出した。組み合わせは不明であるが、時期的には平安時代後期頃（12世紀後半）のものと考えられる。

この下層の古墳時代の遺構面からは幅約5m、深さ約60cmの溝（SD 01）を検出した。この溝は北東から南西にのびるもので、溝端から緩やかに傾斜し、中央付近で急に深くなる。遺物は多く、特に中央部の最下層から大型の破片が集中して出土した。時期的には4世紀後半のものと考えられる。

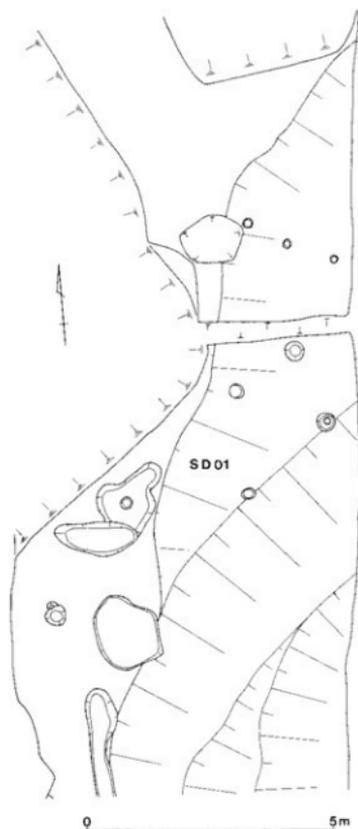


fig. 133 C区遺構平面図

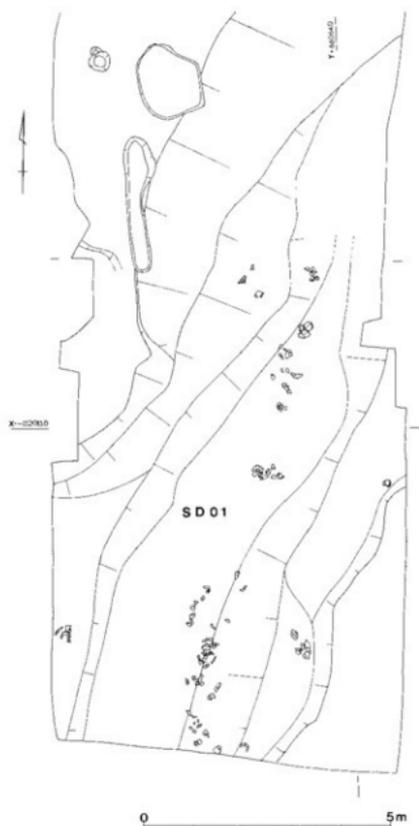


fig. 134 D区遺構平面図

- D 区 C区で検出したSD 01の続きを検出した。
- SD 01 幅5m、深さ80cmを測り、僅かに南方へ弧を描いて流下する。最終埋土層である黒色粘質土層より、多くの遺物が出土した。特に流路の岸に集中して出土しており、器表面の遺存状況は悪いが、接合する破片が多く、当該地で投棄されたと考えられる。
- 遺物 整理作業は完結していないが、機種構成では、高杯の比率が高い。小型丸底壺・器台・ミニチュア土器も出土しており、何らかの祭祀が行われた可能性が高い。僅かながら埴輪片も出土している。須恵器は全く出土していない。

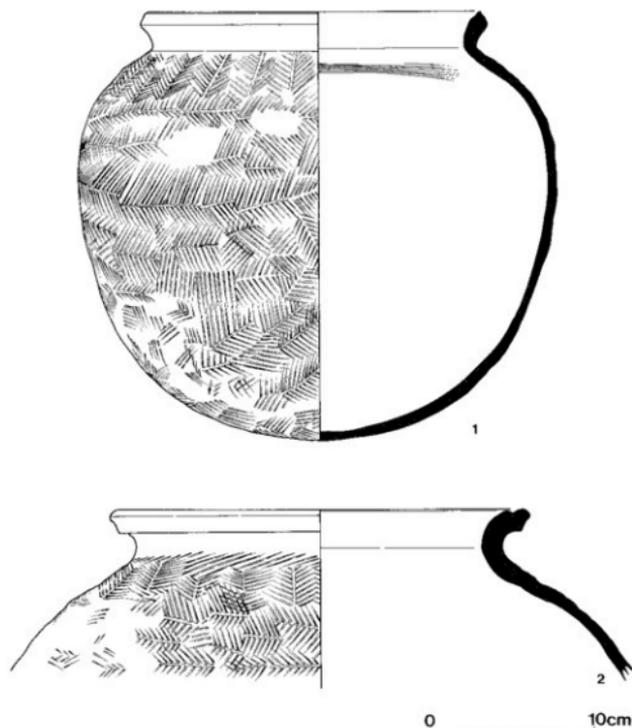


fig. 135 出土土器実測図（1：A区埴壺 2：A区出土土器）

3. まとめ

今回の調査地付近に古墳時代の集落が広がることが確認できた。現状では集落域の端がどこまで広がるかは不明であるが、今回の調査成果と周辺の地形などから、更に北側に延びる可能性は大きいと考えられる。集落の中心は、今回の調査地点の東南側の付近にあると考えられる。

次に、多くの遺物を出土した溝SD 01は、南側の発掘調査で検出された「大溝遺構」とつながる可能性が高い。

たかつかやま
23. 高塚山古墳群 第2次調査

1. はじめに 高塚山古墳群は、古くからその存在が知られていた。昭和50年頃、開発計画がおこり、分布調査や試掘調査が行われた結果、15基の古墳が確認された。

当古墳群は、福田川と伊川に挟まれた丘陵上に存在する。埋葬施設は、いずれも横穴式石室を採用し、築造は6世紀後半に開始されたと考えられる。

今回の調査は、1・7～9号墳の4基の古墳を対象に調査を実施した。

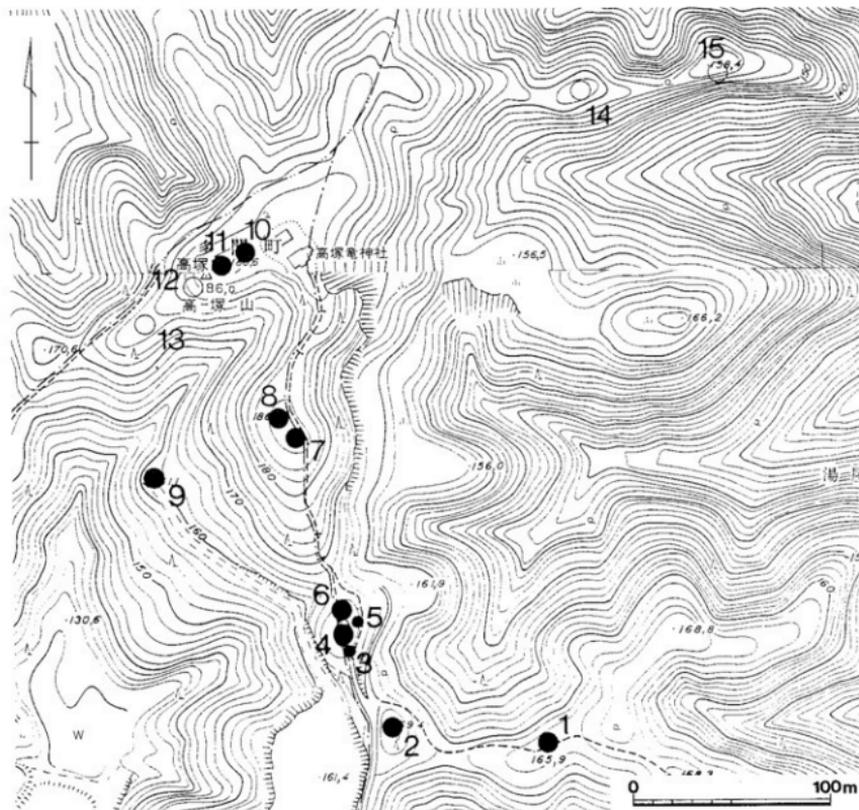


fig. 136 高塚山古墳群 1～15号墳位置図 1:2500

2. 調査の概要 1号墳は、高塚山古墳群の中で最も南に位置し、墳丘頂部の標高は164.60mと最も低い所に造られている。墳丘は東側と西側で尾根を切断するように溝状に掘削し、盛土を行って築造している。墳形は南北に長い楕円形をしており、墳丘の現存高は約2.5mである。

1号墳

石室は、両袖式で南西に開口し、玄室と前室・羨道に分かれた複室構造の横穴式石室である。また、玄室の横幅が玄室長より広い形のいわゆる「T字形」の石室で、横幅と奥行の比が約3：2の割合になっている。玄室を構築するにあたっては、厚みのある板状の基底石を立てて据え、2段目から上は小口積みになっている。持ち送りは認められず垂直に立ち上がっている。東の袖石は大型の石材を立てて据え、西袖石は前室側壁に沿って小型の薄い板石を立てている。

前室は玄室の袖石から南に左側壁が約2.5 mにわたり、15cm程広く造られている。前室入口の左側壁には、大型の石材を横位に据え置き、袖を造出している。石材の構築は、玄室と同様で持ち送りはなく、垂直に近く積み上げられている。床面には、5枚の板石があり、棺台として使用された可能性がある。

6 mと長い羨道を構築しているが、前室の南端から南へ2 mの両側壁には、約50cmの石材が積まれていない部分がある。これを境に南側の両側壁は、小型の石材を多用し、乱雑に積み上げられている。また、主軸もこの部分からやや南西方向に振っており、床面もゆるやかに傾斜している。この石積みのない部分には、扉のような、施設が造られていた可能性がある。

墳丘築造過程
の祭祀

羨道入口の左側壁側の墳丘中から須恵器が出土した。遺物が出土した付近は、盛土を築く際に一度平坦に整えられ、その上面に土器を置いたものと推定される。出土した土器は甕・短頸壺・甗・高杯2点・ミニチュア台付無頸壺2点である。

玄室からは、刀身や鈎の破片が出土し、鉄製の直刀が副葬されていたと考えられる。また、北東隅と南東隅には須恵器坏身・坏蓋が、北西隅には、ミニチュアの提瓶が底石にもたれ掛かるように出土している。これらの出土遺物から築造時期は、6世紀後半と考えられる。



fig. 137
高塚山古墳群
航空写真

7号墳 7号墳の墳丘頂部の標高は188.27 mで、古墳群中最も高所に立地し、眺望にすぐれる。

墳丘 東西13m、南北17mの楕円形で、墳丘高は約3.5 mで当古墳群中、最も大きな墳丘規模である。墳丘は周溝による区画は認められないが、地山を段状に整形し裾部を造っている。墳丘の南側には上下2段に外護列石が設けられていたが、西側の上段の列石は流失している。下段の列石は、墳丘裾の境界に置かれ、上段の列石は地山と盛土の境界に置かれている。

石室 南西に開口する右片袖式の横穴式石室である。この石室は、古墳群中で最も石室高が高く、残存高が2.6 mある。石材も大型のものを多用する石室である。

玄室は5段、羨道で4段残っていたが、天井部は崩落していた。石室構築にあたっては、奥壁の基底石を垂直に立て、側壁はわずかに内傾させ、少しずつ持ち送っている。最上段に近い玄室の北西隅は、奥壁から側壁にかけて石材を斜めに架け、持ち送りながら石材を組み合わせている。右側壁の玄門付近では、3段目以上の石材に、長辺が1.5 mを越す大型の石を積み上げている。

また、石室の床面は、玄室では水平に仕上げられているが、羨道部では、袖石を境に石室外へゆるやかに傾斜させている。基底石もこの床面に合わせて据え並べているため、羨道の石積みは、袖石を境に、床面の傾斜にそって目地が斜めに通っている。最上段の石材上面も、墳丘の傾斜面に一致している。

遺物出土状況 玄室からは、馬具や鉄鍬などの鉄製品の細片や、金環、鞘金具などとともに、須恵器の平瓶や坏・高坏などが出土している。複数の埋葬が行われたようで、敷石の下からも遺物が出土した。

敷石の下からの遺物は少ないが、敷石直上のものは、6世紀後半の遺物が多く出土している。これより、少し上層には、6世紀末頃の遺物が多く出土している。

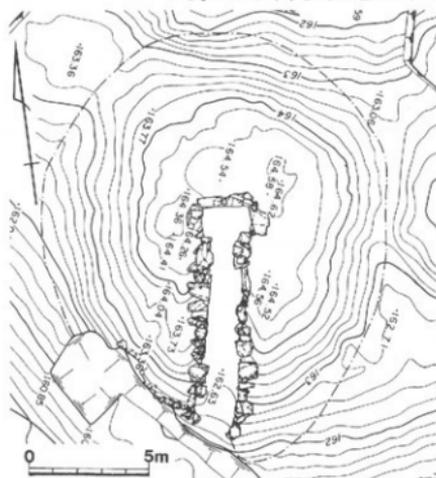


fig. 138 1号墳墳丘測量図



fig. 139 7号墳墳丘測量図

8号墳

7号墳のすぐ北側に築造されている。7号墳と同様に南西方向の眺望に優れているが、南側から見ると、7号墳の高い墳丘の裏側に位置し、目立たない。

墳丘

東西11m、南北17mの楕円形の墳丘で、東側は幅2.5m・深さ80cmの周溝で画し、尾根の稜線に近い北側も、墳丘裾を浅く削っている。西側は急斜面で盛土も流失したらしく墳丘の境が不明瞭となっている。墳丘高は、東側の周溝底から2mである（標高186.21m）。

石室

石室は、南西に開口する石片袖式の複室構造の横穴式石室で、全長13.3mと当古墳群中で最も長い。石室入口から玄室までの間の両側壁に、2か所、柱状の石材を立てている。玄室と前室・羨道は、この立柱石を立てることによって区画されている。玄室床面には、凝灰質砂岩の板石を敷きつめていた。また、羨道入口の立柱石から南にも、乱雑に積まれた石組みがあり、この部分を羨道の一部か、墓道の一部と理解するか、今後検討を要するところである。

玄室内では、2カ所の火葬跡が認められた。前室と羨道でも1か所ずつ火葬の痕跡が確認された。

この石室から出土した土器の内、最も古いものは6世紀後半のもので、石室の築造はこの頃に行われたと推定される。また、出土遺物の最も新しいものは、7世紀前半頃のものであり、この時期まで追葬が行われたと考えられる。

各棺の火葬時期については、出土遺物と木棺の位置関係など詳細な検討が必要である。熱残留磁気測定を行っており、その分析結果とあわせて検討を行いたい。



fig. 140 8号墳墳丘測量図

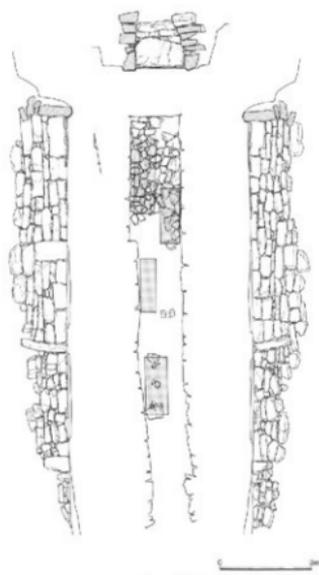


fig. 141 8号墳石室測量図

9号墳

7・8号墳がある尾根の西側斜面の小さな平坦地に築造している。墳丘頂部の標高は165.8 mで、8号墳との比高差は32mである。墳丘は東西13m、南北15mの楕円形である。東側には、明瞭な溝が半周しているが、西側では、わずかな痕跡をのこす程度となっている。もとは全周していた可能性が高い。墳丘の現存高は東側の周溝底から3.5 mである。

線刻画石

玄室、左側壁の4段目の最も奥壁よりで、魚を線刻した石材が発見された。線刻は、この石材の右半分に、繊細な線で描かれている。魚は上下に2匹、双方とも頭を左にして描かれている。

下方に描かれた魚は、右端に尾鰭が表現され、体の下方には鱗を表現したと思われる弧線が描かれている。上方の魚は、体部が楕円形に描かれ、胸の付近に小さな鱗を表現している。尾鰭は弧線で描かれているが不明瞭である。

石室

石室は凝灰質砂岩を使用した石片袖式の横穴式石室で、7号墳に次いで大きな石材を多用している。南に開口しており、羨道から石室外へ幅2mの墓道が掘られている。

玄室は5段、羨道で4段石積が残っていた。石室の構築にあたっては、3段目までをほぼ垂直に積み、4段目からは少しずつ持ち送っている。また、玄室北西隅では、石材を奥壁から側壁に斜めに架け、組合せながら構築されている。このような石室の構築方法は、6・7号墳で認められた。

玄室には、板石を敷いており、玄室の南半から墓道にかけて排水溝が掘られていた。盗掘を受けており、2点の耳環が出土しただけであった。

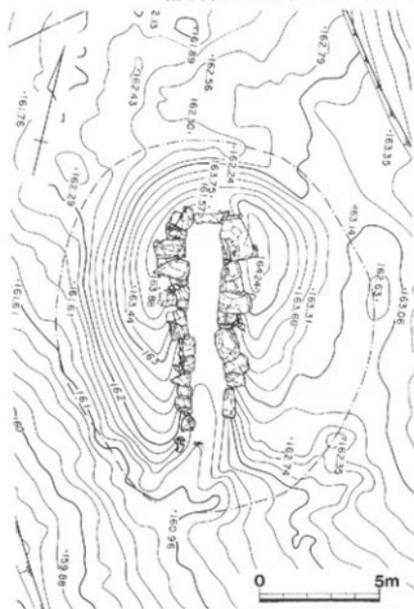


fig. 142 9号墳墳丘測量図

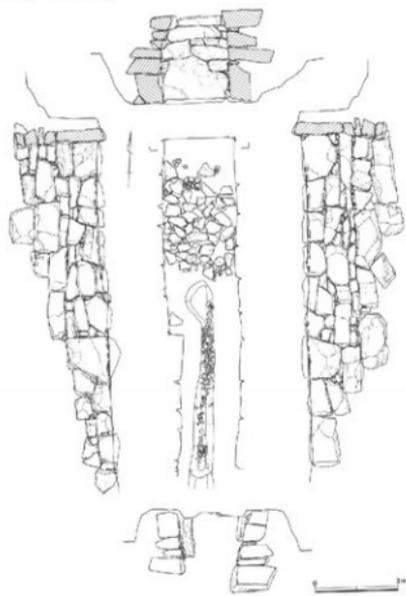


fig. 143 9号墳石室測量図

3. まとめ

第1次・2次調査で高塚山古墳群の半数を超える9基の古墳を調査した。埋葬施設は、すべて付近で採れる凝灰質砂岩を使用する横穴式石室であった。多くの古墳では盗掘を受け遺物が失われていたが、8号墳のように、盗掘による攪乱をまぬがれ、埋葬の状況を明らかにすることができたものもある。高塚山古墳群の実態は、今まで不明な点が多かったが、今回の調査で石室の構造や埋葬の方法について多くの発見があった。

まず、1号墳や8号墳のような複室構造の横穴式石室は神戸市では初めての発見で、県下においても9例目となる貴重な資料である。特に1号墳は、T字形の石室で複室構造となる極めて特異な形態のもので、近畿地方では、初めての検出例となった。

また、8号墳の横穴式石室内で行われた火葬跡の検出例も、神戸市では初めてのものである。石室内では、玄室、前室、羨道で火葬が行われているが、各棺の火葬の時期や火葬の方法は、今後、科学分析とあわせて検討する必要がある。

2・9号墳の石室壁面に描かれた線刻壁画は、市内では、北区の北神第3地点古墳の石室内で見発見された「○」印の線刻とあわせて3例目となった。県下でも7例と貴重な資料である。

高塚山古墳群1～9号墳の概要は、「高塚山古墳群発掘調査概要」として1994年に刊行している。

なお、1号墳については、神戸市埋蔵文化財センターのある西神中央公園に移築し、公開している。

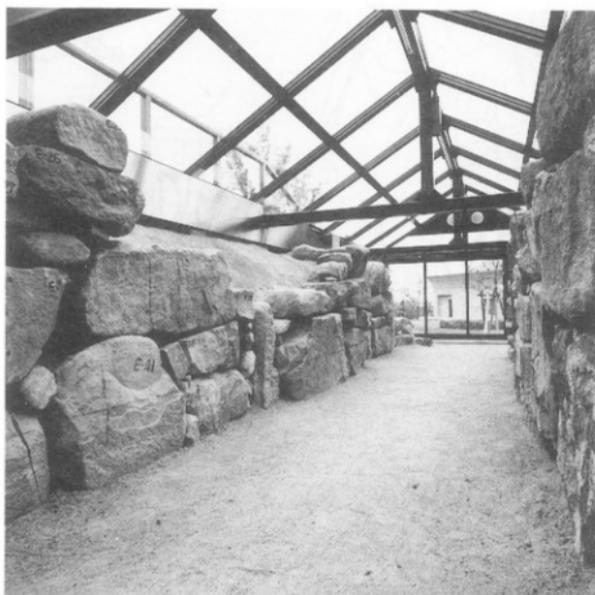


fig. 144 移築した1号墳石室

24. 狩口台きつね塚古墳

1. はじめに 狩口台きつね塚古墳は、明石海峡を見下ろす山田川と狩口川にはさまれた標高42mの中位段丘上に築かれた古墳である。

これまでに、市営住宅の建て替え等に伴う発掘調査によって、きつね塚古墳周辺の丘陵上には弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居などの遺構が確認され、大規模な弥生時代の集落址であることが判明している。

今回の調査は、平成3年度より引き続き実施したものである。調査の目的は、狩口台きつね塚古墳の内容をより鮮明にした上で、復元整備の資料を得るためである。

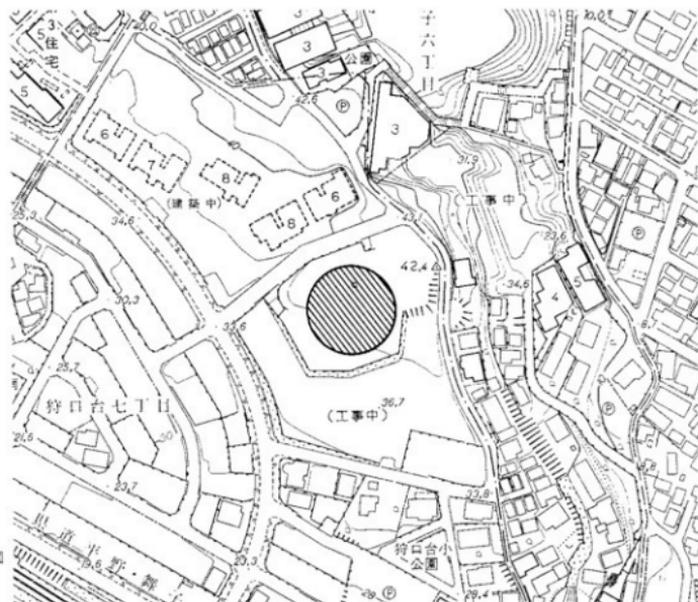


fig. 145
調査地点位置図
1 : 2500

2. 調査の概要 発掘調査は、まず埋葬施設の調査を中心とする1トレンチ(石室トレンチ)と、これに直交して墳丘を断ち割るトレンチ(2トレンチ・3トレンチ)を設定して実施した。この他に、石室主軸延長上で石室奥壁の裏側にあたる部分(6トレンチ)と、石室主軸から45°振った部分(4・5トレンチ)にも設定して調査を実施した。なお、いずれの調査区も真砂土を厚さ10~30cmで養生した後埋め戻し、現況に復旧した。

第1トレンチ 横穴式石室の内容を明らかにするため設定した幅約4m、長さ25mのトレンチである。墳丘の小段、埋葬施設である両袖式の横穴式石室とこれに付随する外部施設を確認した。墳丘上段は開口方向以外が馬蹄形に残存している状況で、横穴式石室の天井石は調査前より抜き取られていると推定できた。

埋葬施設 埋葬施設は、南西方向に開口する全長9.5mの両袖式の横穴式石室で、玄室、羨道、墓道、排水溝から構成される。

玄室 玄室は長さ4.5m、幅2.2mで、奥壁は残存高2.5mで巨石を2段に配し、側壁は最高4段までの石材が確認できた。本来の玄室の天井高は3m前後であったと考えられる。袖石には、高さ1.5mの立石を左右に配し、玄門としている。玄門の幅は1.25mで、玄門の床面には凝灰岩質砂岩を直方体に整形した石材を3つ組み合わせた桐石が配される。桐石の羨道側の長側面にはノミ状工具による調整痕が明瞭に遺存している。玄室には断ち割り調査の結果、レベル差約10cmの床面が2枚確認できた。まず、下層床面は地山層の黄色粘質土を掘り込んだ石室掘形底面に、直径2～5cm大の円礫を敷きつめたもので、玄門左袖部分で鉄製素環鏡板付簪1点、鉄鎌1点、ほぼ中央で須恵器無蓋高坏片1点が砂利層にややめり込んだ状態で出土している。一方、玄室上層床面は、下層床面の副葬品の整理を行った後、下層床面上面に精良な赤黄色粘質土を盛って整地し、さらに直径2～3cm大の円礫を敷きつめたものであったと推定される。しかし、盗掘坑が随所に認められ、崩された側壁石材が床面に落ち込んでいる状態で、実際は床面の円礫層は遺物が集中して検出された奥壁沿いから左側壁沿いに遺存する程度であった。

また、玄室から羨道にかけての埋土より、内面に赤色顔料の塗布された組合式の家形石棺（凝灰岩質砂岩製）の破片も多く出土していることから、上層床面に対応して家形石棺が納められていたと考えている。

羨道 羨道は長さ5.0m、幅1.5m前後で、羨門幅は1.5mである。羨門部の両側壁立石と右側壁の一部を除いて石材は抜き取られており、床面も掘形底面まで盗掘が及んでいた。両壁とも抜き取り痕からみて、3～4石の3段積み程度の壁面を構成していたものと考えられる。また、羨門部には掘形底面からやや浮いているものの、閉塞石と考えられる人頭大の角礫が10個程度確認できた。これは、上層床面に対応するものと考えている。

墓道 墓道は長さ6.0m、上端幅2.8m、下端幅1.7m、深さ1.5mのものである。墓道入口の石室に向かって左側の小段には須恵器の把手付直口甕が埋置されていた。

内漆は墳丘裾に攪乱があるため正確ではないが、幅約4mで巡っていると推定できる。そして、内漆をはさん

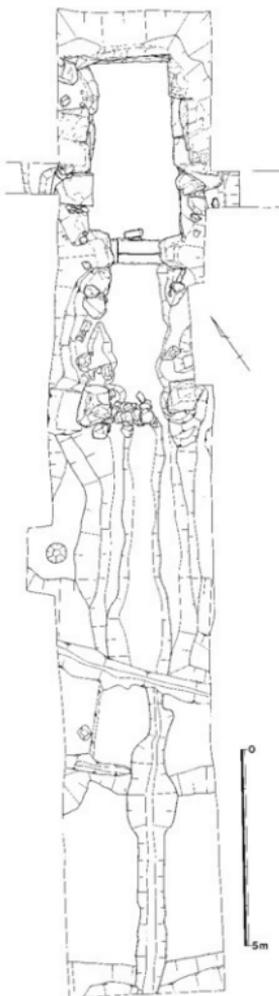


fig. 146 第1トレンチ平面図

で石室主軸延長線上には、長さ7.6m、最大幅70cm、深さ50cmの排水溝がある。内濠の底面よりわずかに低いことから、内濠の排水を行う機能があったと考えられるが、この部分では外濠が削平されており、三者の関係は明確にできなかった。

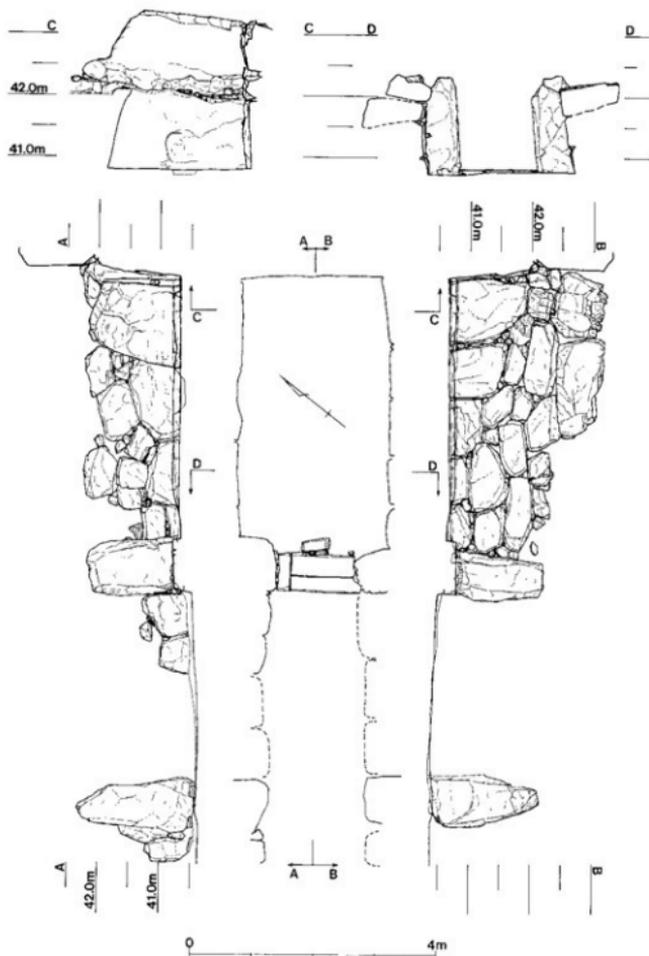


fig. 147 第1トレンチ横穴式石室平・断面図

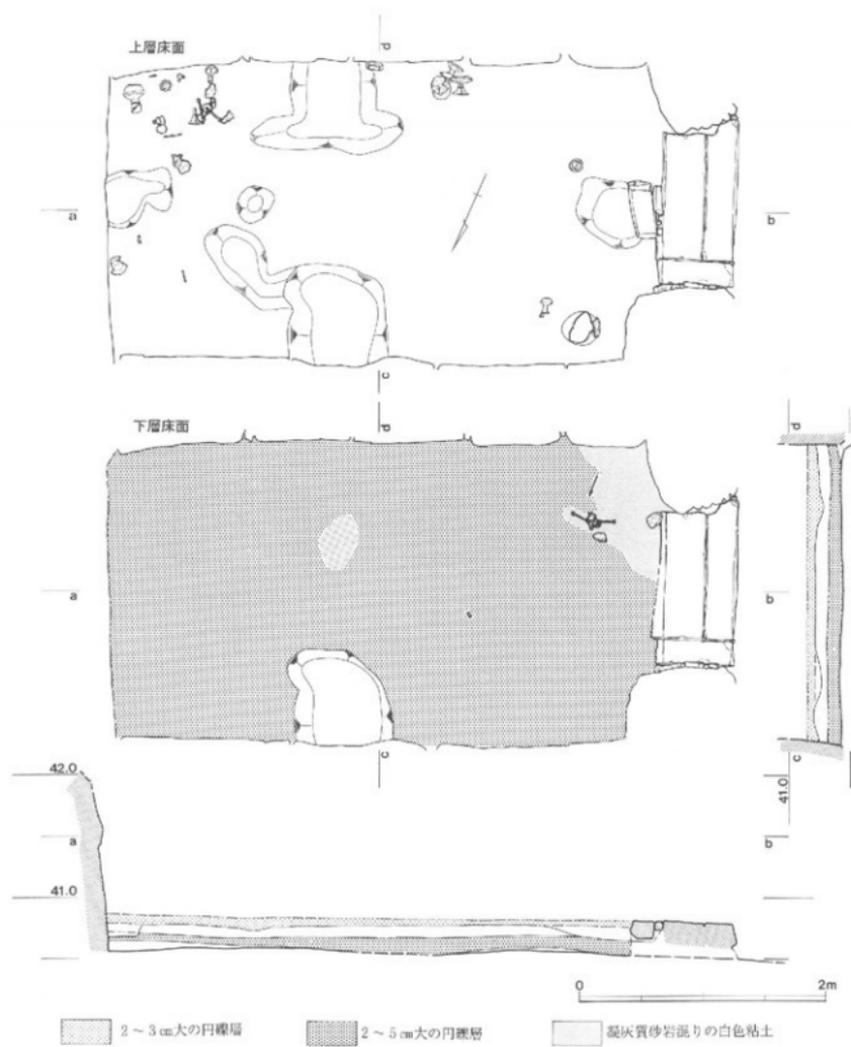


fig. 148 支室床面遺物出土状況平面図

第7トレンチ 先述した小段に埋置された須恵器と、昭和54年に確認された須恵器の層位的な関係と、それぞれの位置関係を明確にするために設定したトレンチで、1トレンチと4トレンチの間にあたる。調査の結果、埋置された両者の須恵器は4mの距離を隔てていることが明らかとなった。

第2～3・6トレンチ 2トレンチは幅1m、長さ12m、3トレンチは幅1m、長さ9mのもので、横穴式石室主軸に直交する方向に設定した。また、6トレンチは幅1m、長さ12.5mのもので、石室主軸と同一方向に設定し、墳丘小段の有無の確認と墳丘の築成過程を調査した。

2トレンチでは墳丘の小段(幅約2m)と墳裾平坦面と内濠の肩部(幅2m以上、深さ0.4m)を確認し、3トレンチでは墳丘の小段(幅約2m)を、6トレンチでは墳裾平坦面と内濠をそれぞれ確認した。

墳丘の断ち割り さらに、2・3・6トレンチでは墳丘の断ち割り調査を実施した。トレンチの土層断面からみると、黄色砂砂質土と褐色ないしは黒色砂質土を交互に突き固めながら基盤層から盛られているようで、石室上面から墳丘裾に向かって徐々に高さを減じる層位を示している。これを復元的にみると、狩口台遺跡の弥生時代中期から後期の遺物包含層上面から掘り込んで、玄室(幅5.6m)～羨道の掘り方を行い、最下段の石材を並べる。石材の裏込めを締め固めながら、礫石石材の上面が揃うまで、さらに盛り土を行う。順次盛り土と石材の積み上げの作業を交互に繰り返しながら、墳丘を整えていく。石室奥壁の残存高と、この盛土の上面と小段面の三者それぞれが層位的に対応することから、天井石架構までの段階に下段の墳丘が完成したと考えられる。そして、天井石を被覆する形で上段の盛土を一気に行ったものと考えられる。この上段の盛土は下段墳丘盛土に比べ柔らかく、層位は比較的レベルに近い。

第4・5トレンチ 4トレンチは幅1m、長さ10m、5トレンチは幅1m、長さ7mのトレンチで、両者とも幅2m前後の小段面と墳丘の裾部を確認できた。

第3トレンチ 外濠と内濠の位置を墳丘および石室と一体の関係で把握するために、3トレンチを南東へ延長して設定したトレンチである。外濠と内濠の規模は、外濠が幅2.7m、深さ0.25mで、内濠が幅4.8m、深さ0.2mで、両者は5.7mの距離を隔てている。内濠から須恵器変の小片が出土したが、外濠からは全く遺物が出土しなかった。

出土遺物 出土した遺物の大半は、石室から出土したものである。

〔須恵器〕	有蓋高坏	7点	同蓋	3点	無蓋高坏	4点
	蓋	1点	長頸壺	4点	甗	4点
	大型甗	3点	小型甗	3点		

〔鉄製品〕 総数100点に及び、金銅装花形鏡板付釦1点、金銅装花形杏葉2点、金銅装雲珠1点、金銅装注金具4点などが含まれている。

また、この他には、墳丘盛り土内から弥生土器(中期～後期)、磨製石庖丁、磨石、サヌカイトなど狩口台遺跡に伴うと考えられる遺物が出土している。

古墳の時期 古墳の時期は、出土遺物のうちの須恵器で判断することができる。玄室の床面が2面確認されたように、須恵器にも大きく2時期のものが含まれている。下層床面から出土した無蓋高坏を含む古式のものがTK43型式に、その他のものがTK209型式に比定できるこ

とから、6世紀後葉には築造され、7世紀初頭までに石棺を伴う再葬が行われたと考えられる。これらの時期は、従来馬具の編年で、下層床面の鉄製素環鏡板付轡が6世紀後葉、花形鏡板・花形杏葉が6世紀末葉～7世紀初頭に比定されていることから補強できよう。

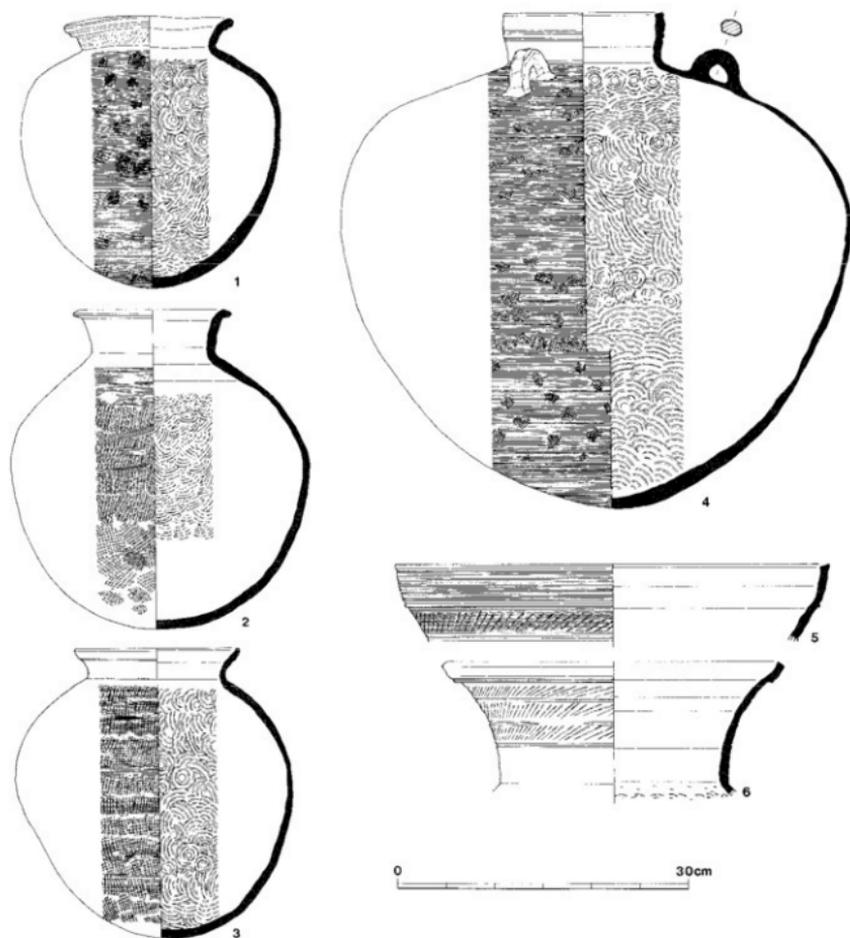


fig. 149 出土須恵器実測図

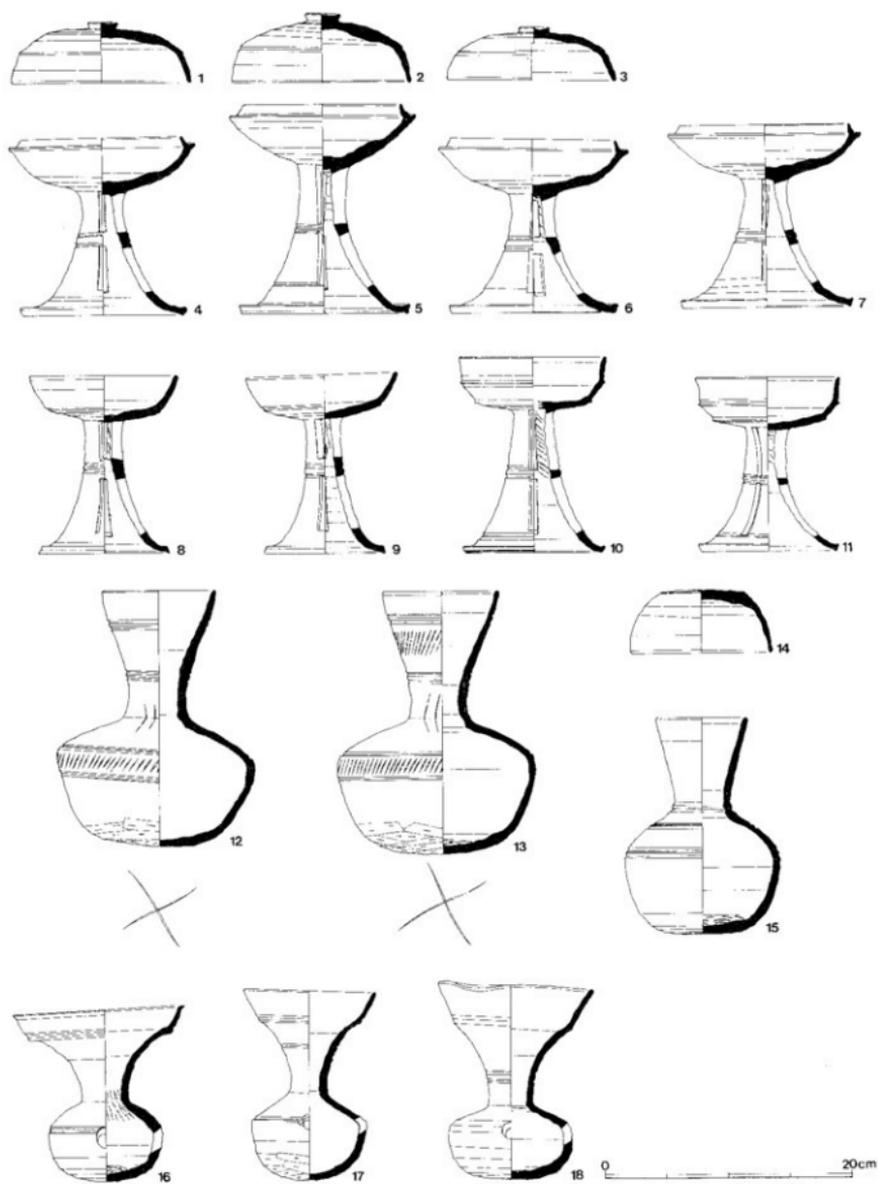


fig. 150 出土铜器器类图

3. まとめ

今回の調査では、狩口台きつね塚古墳の埋葬施設の実態を明らかにできただけでなく、墳丘の築造過程が把握でき、復元整備に向けての資料を多く得ることができた。

中でも、狩口台きつね塚古墳が山田川右岸域に立地する後期古墳の中でも最下流に位置し、明石海峡を見下ろす位置に立地することや、当古墳が6世紀後半ごろに築造され、二重の周濠で直径52mの墓域をもつ単独墳で、組合式の家形石棺を内蔵する横穴式石室を埋葬施設とするということは、今後当古墳を含めた山田川流域の古墳の展開を考える上で、極めて重要な新しい資料を提供することとなった。

また、副葬品からみると、金銅装の馬具は近畿地方ではその類例が少ない点、盗掘があったものの副葬品に装飾品が全く欠如している点、須恵器の器種に坏がない点など被葬者像を考えていく上で示唆に富んでいる。

なお当古墳は調査結果に基づき、平成4年度末に復元整備工事が完了している。

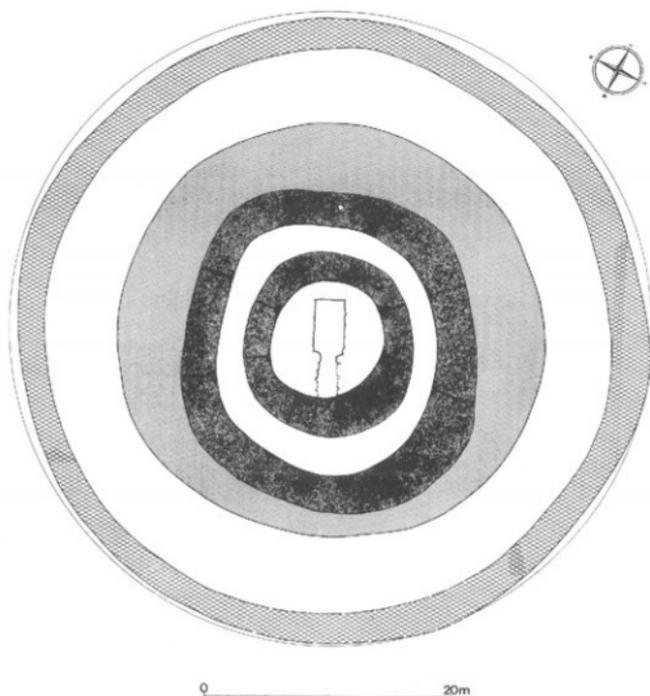


fig. 151 墳丘整備平面図

25. 今池尻遺跡

1. はじめに

潤和遺跡は西区伊川谷町潤和に所在する遺跡で、遺跡の東を南流する伊川により形成された氾濫原上に立地している。調査地は伊川右岸に位置し、現在の伊川から西500mのところである。調査区内の土層は、標高14m付近まで青灰色シルト層が堆積し、上層は緩やかに堆積した細砂層となっている。現地表面は標高16m付近である。

周辺の遺跡の代表的なものには、南東200mに弥生時代の大集落である新方遺跡、北300mの、標高約60mの薬師山山頂に全長57mの白水瓢塚古墳が存在する。



fig. 152
調査地点位置図
1 : 2500

2. 調査の概要

今回の調査は、倉庫の基礎部分の調査で、2m×3mの調査区を6か所設定し、遺構が確認された部分は一部拡張して調査を行った。調査は現耕土・床土を重機により除去し、以下は人力により掘削を行った。地区毎の6か所の調査区は基本的に同様の堆積状況を示しており、大半は細砂～極細砂層が堆積している。遺構面としては暗灰色シルト層上面（弥生時代後期）と、灰黄色細砂層上面（平安時代後期ならびに中世）の2面が確認されている。

第1区

調査区内すべてが流路内にかかっていた。砂層に混じり須恵器・土師器の破片が完形で出土しているが、流路の規模などは不明である。

第2区

床土直下で流路1条、濁青灰色シルト層から切り込む土坑1基を検出した。

平安時代後期

SD 401
調査区全体にかかるために幅は不明であるが、深さ60cmが遺存している。最終埋土である黒灰色粘質土に炭化物が多く認められ、灰褐色極細砂層が堆積、底部に植物遺体の沈殿層が堆積している。土器は灰褐色極細砂層下部から植物遺体層との境目あたりから集中し

て出土している。土器はほとんどが完形に近い状態のものである。

弥生時代後期 東西1m、南北70cmで平面形が隅丸長方形である。深さ10cmで、中から土器がまとめて出土した。底部には火を受けた痕跡が残っており、調査区の壁面観察結果とも考え合わせると住居内の中央土坑の可能性もある。また、周辺にピットらしき痕跡が認められたが、いずれも極浅いもので判然としない。

調査区 上記以外の調査区については、遺構は検出されていないが、遺物包含層とその下層の遺構面と考えられる層が確認されており、生活面が広がっているものと考えられる。

遺物 遺物は第4区を中心に出土している。SD 401 出土の須恵器・土師器は、椀・皿を中心に出土しており、他に緑釉の皿片が1点出土している。SD 401 に関しては、完形もしくは完形に復元できる土器がかなり出土しており、流路に一括投棄された可能性が高い。また土師器皿の一部には灯心が残るものもある。SD 401 の土器は平安時代後期（11世紀初頭）の年代が当てられる。

弥生時代については後期後半の土器しか認められない。調査区外に広がるため詳細は不明であるが、かなりの土器が存在したと考えられる。

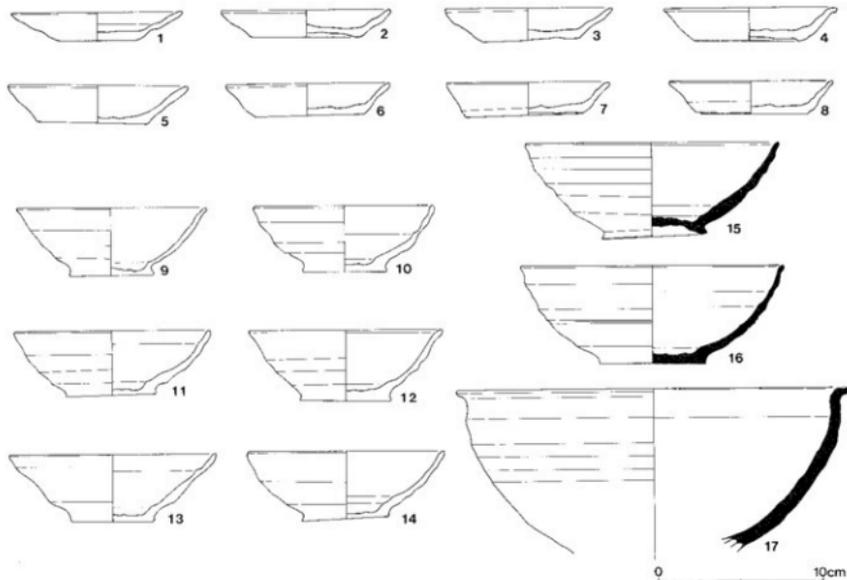


fig. 153 SD 401 出土土器実測図 (1~14: 土師器 15~17: 須恵器)

3. まとめ 当遺跡は、今日まで試掘調査によってその存在が知られていたが、弥生時代後期、平安時代後期の確実な遺物が出土したことにより、隣接する白水・潤和・新方の各遺跡との関連を考える上で貴重なものとなった。現在設定されている遺跡名とは別に、時期別の遺構と広がりやを考慮しながら、今後その性格を明らかにしていきたい。

26. 白水遺跡

1. はじめに

白水遺跡は西区伊川谷町調和に所在する遺跡で、遺跡の東を南流する伊川により形成された氾濫原上に立地している。調査地は、現在の伊川から西500mのところである。調査区内の土層は、標高14m付近まで青灰色シルト層が堆積し、上層は緩やかに堆積した細砂層となっている。現地表面は標高16m付近である。

周辺の遺跡の代表的なものには、南東200mに弥生時代の集落である新方遺跡、北300mの標高約60mの薬師山山頂に全長57mの白水瓢塚古墳が存在する。



fig. 154
調査地点位置図
1 : 2500

2. 調査の概要

今回の調査は、倉庫の基礎部分の調査で、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ の調査区を6か所設定し、遺構が確認された部分は一部拡張して調査を行った。調査は現耕土・床土を重機により除去し、以下は人力により掘削を行った。6か所の調査区は基本的に同様の堆積状況を示しており、大半は細砂～極細砂層が堆積している。遺構面としては暗灰色シルト層上面（弥生時代後期）と、灰黄色細砂層上面（平安時代後期ならびに中世）の2面が確認されている。

第2区

第2区では暗灰黄色細砂から切り込む自然流路1本と暗灰色シルト層から切り込む竪穴住居1棟を検出した。

平安時代後期

SD 201

流路の西肩の一部を検出した。検出長4m、検出幅2mで、埋土は細砂層と小礫の互層であった。流路中から土器片や小枝状の流木が出土している。SD 301の延長部分である。

弥生時代後期

SB 201

径約10mと考えられる円形の竪穴住居である。平面形は円形であるが、内部の居住空間は支柱穴の検出位置等から五角形になるものと考えられる。周囲にはベッド状遺構がつくられており、上面には炭層が点在していた。中央土坑は直径約2m、深さ60cmで上層には

炭が多く認められた。

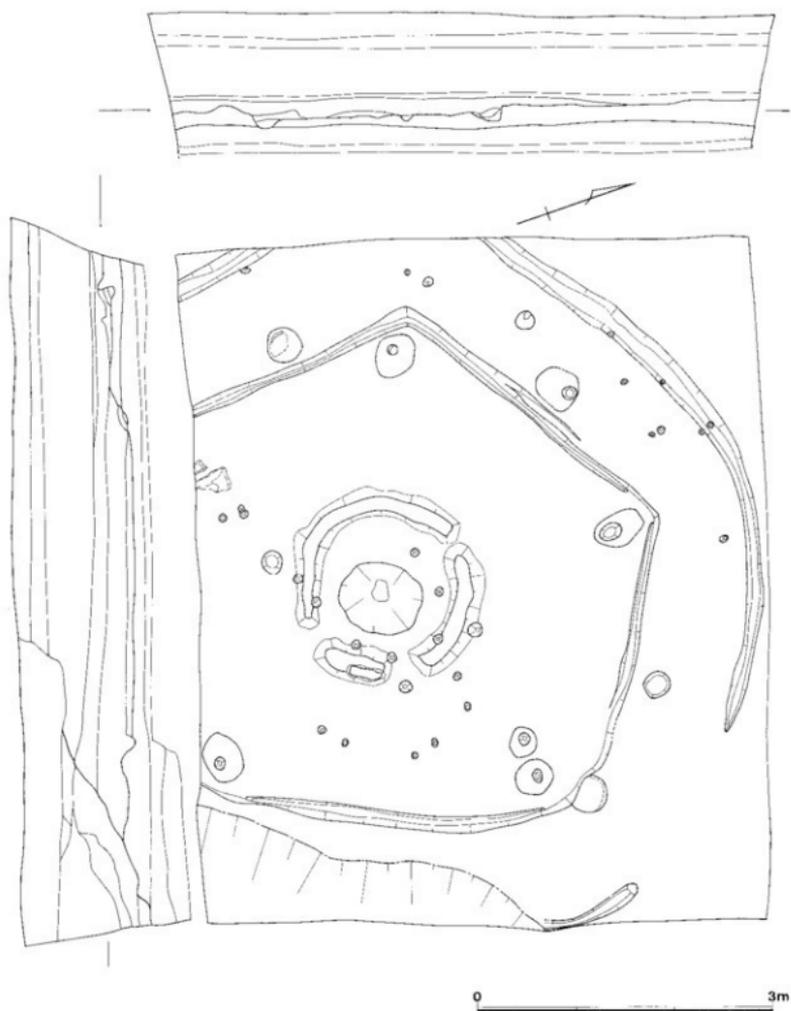


fig. 155 SB 201 平・断面図

第3区

第3区では暗灰黄色細砂から切り込む自然流路1本を検出した。

SD 301

当初、西肩の一部を確認したため拡張トレンチを設定し流路幅の検出につとめたが、調査区内においては全容を知ることはできなかった。土層観察の結果から、幅は十数mと推定できる。遺物は西肩にそって堆積しているシルト層に多く混じっており、灰層や植物層も見られた。また遺物に混じって焼石が多く出土し、一部火葬骨が検出されていることから、付近で茶甕に付された後に流路に投棄された可能性がある。しかし、火化していない人骨(頭骨)も出土しており、どのような性格のものかは判然としない。

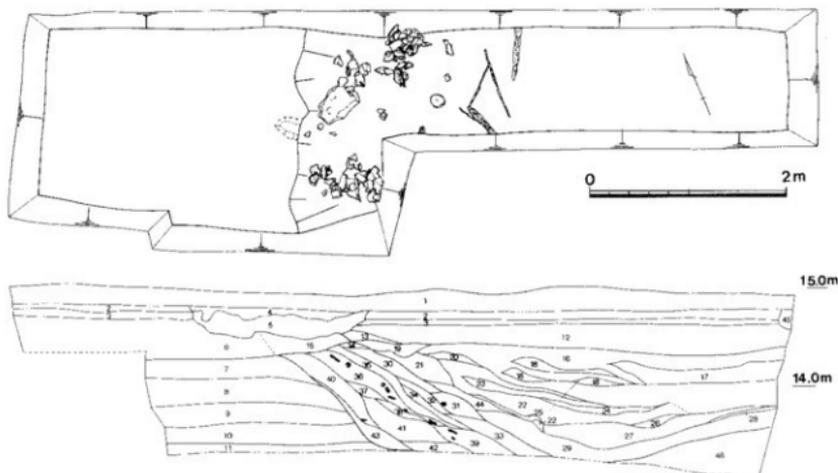


fig. 156 SD 301 平・断面図

第5区

幅1m～1.4mで東側でやや広がっており、検出長2m、深さ80cmである。埴土は大

SD 501

半がシルト層である。須恵器片・土師器片が出土した。

第6区

第6区では黄灰色粗砂から切り込む溝1条と暗灰色砂質シルトから切り込むピット1か所を検出した。

SD 601

幅約80cm、深さ20cmの溝で、土師器械の高台部分1個が出土した。

ピット

調査区の壁面観察で判明したものである。径は約20cm、深さは50cmである。中から完形の鉢形土器が出土した。

その他の

上記以外の調査区については、遺構を検出していないが、遺物包含層とその下層の遺構面と考えられる層を確認しており、生活面が広がっているものと考えられる。

調査区

遺物

遺物は中世・平安時代では須恵器・土師器共に腕を中心に出土している。他に須恵器については皿・壺・控鉢が、土師器については皿・鍋が出土している。特にSD 301では、完形もしくは完形に復元できる土器がかなり出土しており、流路に一括投棄された可能性が高い。また須恵器の壺片は突帯があり、肩部に把手を付けたもので、蔵骨器として使用

した例が多いものである。付近で人骨が出土していることから、この壺片も蔵骨器であった可能性は高い。また須恵器の脚付皿の裏面には一部墨の痕跡が認められ、碗として使用されていたものと考えられる。SD 301 の土器は平安時代後期（10世紀後半から11世紀初頭）の年代が当てられる。

弥生時代については後期後半の土器しか認められない。住居内の土器はあまり接合できず、どれ程の個体数があったかは不明である。器形では高坏と甕が比較的多い。

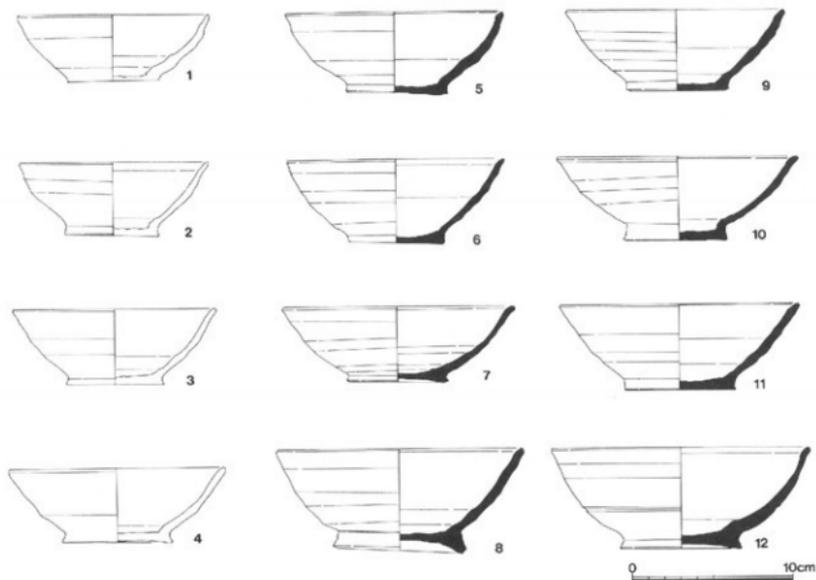


fig. 157 SD 301 出土土器実測図（1～4：土師器 5～12：須恵器）

3. まとめ

今回の調査は限られた範囲での調査であったにもかかわらず、白水遺跡の存在を考える上で貴重な資料を提供した。

まず、弥生時代後期の竪穴住居が確認できたことは付近での集落の存在が考えられ、南西の新方遺跡や伊川流域の弥生時代の集落との関係などを考える上で重要である。

次に、平安時代後期の土器の出土は神戸市域における当該期の遺跡が最近まで僅少であったことから遺跡の拡がりを考える上で貴重なものである。

白水遺跡の調査は、試掘調査等がかなり行われているが、砂層の堆積が著しく顕著な遺構の存在が皆無であったが、場所により良好な状態で遺存していることが、今回の調査で判明した。今後、調査が進むにつれ遺跡の性格がより明らかになるであろう。

27. 白水瓢塚古墳

1. はじめに

白水瓢塚古墳(妻塚古墳)は、伊川右岸の標高約60mの薬師山山頂に位置し、前方部を西方に向けた前方後円墳である。海岸からの直線距離は約3.5kmである。当古墳は、直良信夫氏によって詳細な踏査記録が報告されている。それによると、墳丘に3列の埴輪列が廻ることや、埴輪列の中に楕円形円筒埴輪が混在することが報告されている。また、古墳の周囲には合口式の埴輪円筒棺が約100基存在すると推定している。

昭和43年には兵庫県教育委員会によって墳丘測量が実施されている。

昭和62年度には宅地造成計画に先立って南側の丘陵斜面地で、この白水瓢塚古墳の範囲を確認するための発掘調査が初めて実施された。この結果、墳形はやや歪んだ円形の後円部に、まっすぐ延びる前方部がつくられた、いわゆる柄鏡形の前方後円墳で、全長57m、後円部径31m、後円部高さ5m、前方部幅16m、前方部高さ2mであることが明らかとなっている。また、古墳の周囲の平坦面で、埴輪円筒棺2基、6世紀初めの小型円墳(木棺直葬墓)1基が確認されている。

この調査の後、白水瓢塚古墳については現地保存することを前提とした協議が地権者と進められ、後円部裾から5m、前方部端で幅43mの盾形の範囲で保存区域線を設定し、今日に至っている。

今回の調査は、住宅開発に先立つ試掘調査で、白水瓢塚古墳の北側から東側にかけての丘陵斜面のうち、字シンド山6-5、6-11、6-12番地を調査の対象としている。調査区は、埴輪円筒棺群とその他の遺構の有無を確認するために保存区域線より外側に設定した。

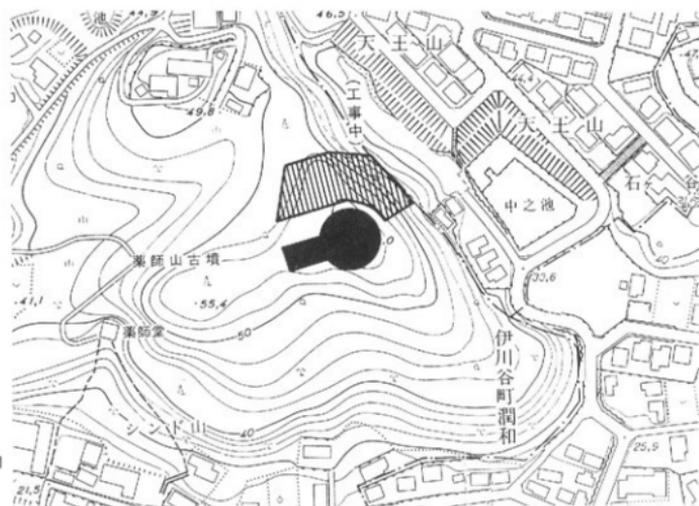


fig. 158
調査地点位置図
1 : 2500

2. 調査の概要 幅1.5～2mの調査区を適宜設定して、試掘調査を実施した。なお、調査区の名称は昭和62年度の調査に続く番号で呼称している。
- 25・26 トレンチ 幅2m、長さ20m前後の調査区で、白水瓢塚古墳の前方部の北方の緩傾斜面にあたる。開墾による土取りの段が確認され、近代の陶磁器が若干出土している。
- 27トレンチ 幅2m、長さ24mの調査区で、くびれ部と埴輪円筒棺1の北方にあたる。遺構は全く確認できなかったが、最上段で保存状態の良い埴輪片と石材が流土中より出土した。埴輪円筒棺が近くに存在するものと考えられる。
これより下位部分については、25・26トレンチと同様開墾による段を確認しており、近代の陶磁器・瓦片が出土している。
- 28トレンチ 幅1.5m、長さ14mの調査区で、後円部から北方へ延びる尾根筋近くにあたる。最上段で埴輪円筒棺を1基確認した(埴輪円筒棺3)。今回は上面検出に止めたが、概ね東半分を検出できたものと考えられる。最大幅60cm、長さ85cm以上の掘形に円筒埴輪(?)をN40°Wを主軸として横位置に据えていることが判る。その大部分は流出しており、底面近くがわずかに遺存しているものと考えられる。また、この埴輪円筒棺の下位約5mの範囲では保存状態の良い埴輪片多数と石材が流土中より出土している。
- 29トレンチ 幅1.5m、長さ12mの調査区で、後円部の北方の丘陵斜面にあたる。厚く堆積した流土中より埴輪片が多数出土している。この調査区部分は小さな谷状の地形であり、円筒埴輪棺に使用されたものが流れたものと推定できる。
- 30～32 トレンチ 幅1.5m、長さ9～15mの調査区で、後円部の北東から東側にかけての、急な斜面である。厚く堆積した流土が確認されたが、遺構・遺物は全く確認できなかった。
3. まとめ 今回の調査では、調査範囲が限定されていたにもかかわらず、昭和62年度調査の2基に加えて、埴輪円筒棺を1基確認できた(28トレンチ)ことが重要である。直良信夫氏が過去に推定されたように、白水瓢塚古墳の周囲の平坦面には、もともとかなりの数の埴輪円筒棺が埋められていたようである。

また、白水瓢塚古墳の周囲には、丘陵斜面が急峻なため、もともと遺構が存在しない範囲(30～32トレンチ)と近代の開墾によって地形改変が行われ、埋蔵文化財がすでに存在しない範囲があることも判明した(25・26トレンチ)。



fig. 159 瓢塚古墳出土朝鮮形埴輪

28. ^{しんほう}新方遺跡北方地点 第2次調査

1. はじめに

新方遺跡は、山陽新幹線敷設に伴う分布調査によって存在が確認された遺跡である。1970年、工事に先立ち発掘調査が実施された。弥生時代中期初頭から鎌倉時代にかけての遺物が多量に出土し注目された。

その後、国庫補助金による範囲確認調査や民間小規模開発、道路拡幅工事に伴う発掘調査が実施されている。個々の調査面積は小さいが、回数をかさねる度に当遺跡が大規模かつ重要な遺跡であることが確認されてきている。

今回の調査は、都市計画道路明石木見線の道路拡幅工事に伴うものである。

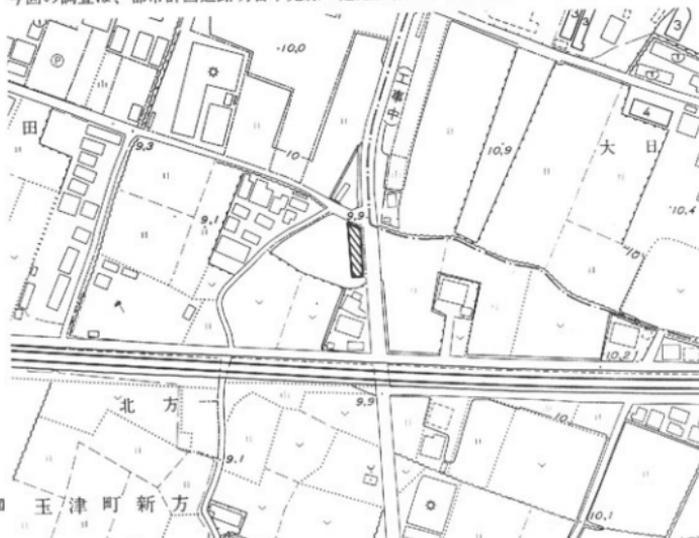


fig. 160
調査地点位置図
1 : 2500

2. 調査の概要

試掘調査の結果から、中世の遺物を含む暗褐色粘質砂層上面まで重機により掘削し、以下はすべて人力で掘削をおこなった。調査区の四周は連壁矢板で囲われ、現地表以下2.5mまで下がった時点で梁を入れ、土留めをおこなっている。

自然流路を含めて、遺構面は4面検出された。

第1遺構面

第1遺構面では、調査区南半分において東西に流れる自然流路を検出した（SR101）。流路は幅約8m、深さ約1.3mである。流路内からは、古代末～中世にかけての土器が多く出土している。流路内中位の淡灰色シルト混じり砂層からは、自然木片に混じって下駄やツチノコ、曲物の底板のほか用途不明の板材が出土している。下駄は、連箇下駄で右足用に使ったものであろう。タイプとしても最も一般的なもののひとつで、地域的にも広範囲に分布しているものである。また、流路両肩付近でいくつか自然木の株が立った状態で出土している。

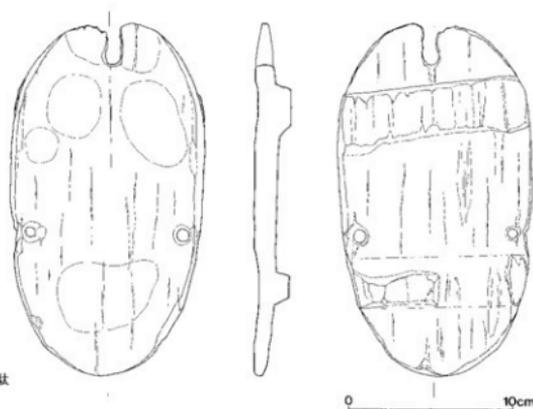


fig. 161 SR 101 出土土駄
実測図

- 第2遺構面** 第2遺構面では、調査区の北半部において溝1条を検出したのみであった。
- SD 201 幅20cm、深さ20cmの東西に流れる溝である。溝中からは土師器の小片が数点出土した。古墳時代に属するものと考えられる。
- 第3遺構面** 第3遺構面では、土坑1基、溝1条、落ち込み1ヶ所が検出された。
- SK 301 長軸2.7m、短軸1.6m、深さ10cmの方形に近い楕円形の土坑である。土坑内からは小型の土師器甕1点と土師器片数点が出土している。布留式併行期に属するものと考えられる。
- SD 301 長さ3.6m、幅30cm、深さ10cmのほぼ南北方向に走る溝である。溝中から土師器小片が若干出土している。
- SX 301 2.3m以上×5m以上の隅田形状の落ち込みである。調査区西壁にむかって落ちており深さは不明である。肩付近から布留式併行期に属する甕が押し潰された状態で出土しているほか、落ち込み内からは土師器片が多数出土している。この落ち込みについては続く下層の調査から、古墳時代の自然流路の中に位置しており、流路の埋没過程の一段階において形成されたものであると考えられる。
- SR 301 東西に流れる流路である。北側の肩は、第4遺構面を削っているが、南側の肩は中世の自然流路によって削平され失われており、規模は不明である。流路底付近から、古墳時代前期の土器にまじって、イダコツボや紡績具の一部とみられる木製品などが出土している。
- 第4遺構面** 第4遺構面では、土坑2基、ピット3か所と流路を検出した。第4遺構面は調査区の南側3分の2が古墳時代及び中世の自然流路により削平されている。
- SK 401 長軸2m以上、短軸1.5m、深さ0.3cmの楕円形の土坑である。土坑は調査区外に続き、南側の一部は古墳時代の自然流路によって削られている。土坑内からは、ほぼ完形に近いと思われる壺形土器1個体と甕形土器3個体以上が出土した。壺形土器から弥生時代第Ⅱ様式に属するものと考えられる。遺構の性格は不明である。
- SK 402 径3.5m以上、深さ1.5mの円形の土坑である。土坑の南半分は古墳時代の自然流路に

よって削られているが、流路の底から90cmほどは残っている。土坑内からは弥生時代中期の土器が少量出土しているほか、黒灰色～暗灰色シルト中から杭が20本以上出土している。杭は径2cm～8cm、長さが20cm～40cmと各種存在する。何本かは立てた状態にあったが、不規則に投げ込まれたようにみえるものもあり、性格は不明である。

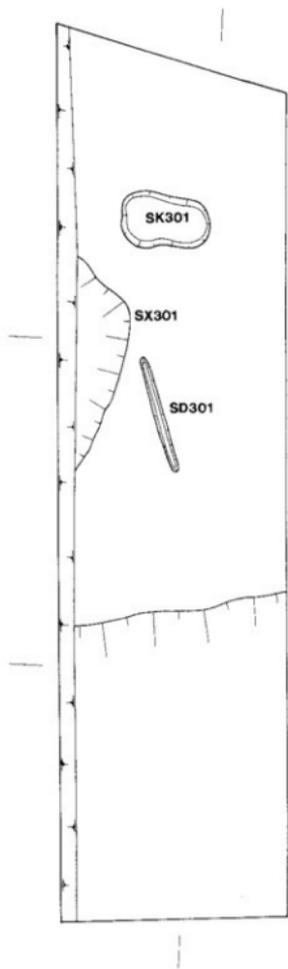


fig. 162 第3遺構面平面図

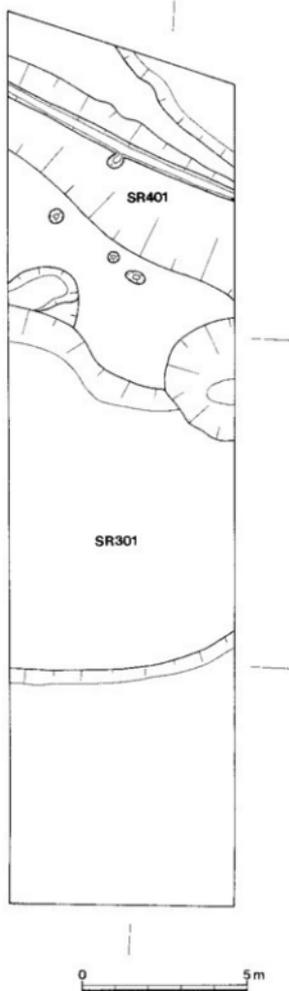


fig. 163 第4遺構面平面図

SR 401 調査区北端に位置し、幅6m以上の流路である。北側の岸は調査区外である。遺構面から70cm下がったところで、幅0.3~2m、高さ50cmの中洲状の高まりがあり、流路内を2本に隔している。流路内からは弥生時代第Ⅲ様式新段階~第Ⅳ様式にかけての土器が大量に出土しており、28ℓ入コンテナで約50杯の量である。流路内は十数層に分層されるが、土器の時期に大差はないものとみられる。土器のほか、分銅型土製品や石製品、玉類、獣骨、獣歯などが出土している。なお、流路直上から碧玉製管玉が出土したため、以下の流路内の土壌はすべて採取し、水洗選別をおこなった。石製品や玉類の種類及び数量は、石鏃187点、石錐58点、石斧2点、石槍1点、磨製石剣2点、磨石2点、石庖丁3点、その他の石器多数、管玉9点、管玉未製品2点などとなっている。管玉未製品のうち1点にはすり切り施溝がみられる。

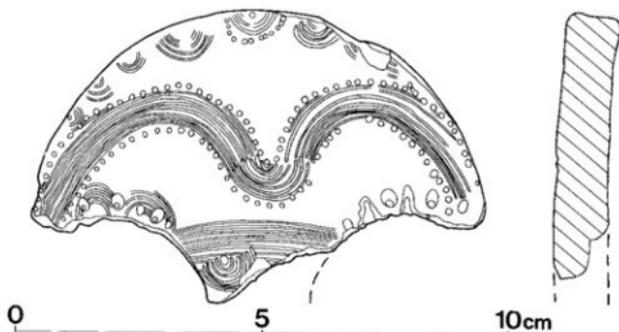


fig. 164 SR 401出土分銅型土製品実測図(実大)

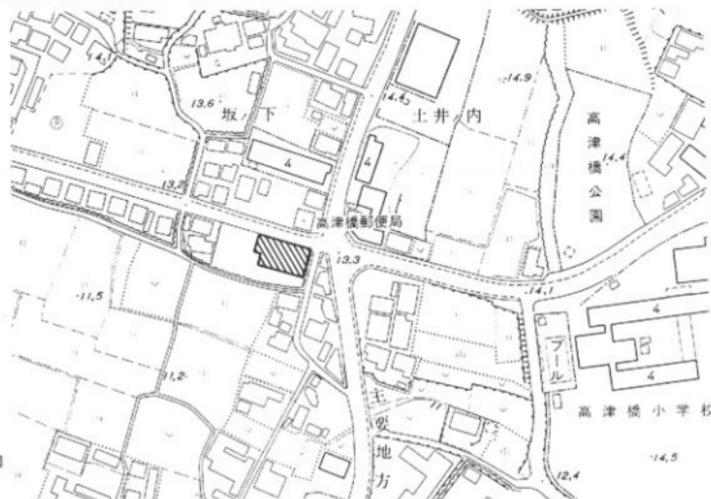
3. まとめ

今回の調査では、調査区内に中世、古墳時代、弥生時代の流路が位置を違えて流れており、その他の遺構はほとんど検出されなかった。昨年度調査の大日地点とは、渠道を挟んで僅か40mしかはなれていないが、基本層序もかなり異にしている。しかし、弥生時代の流路中からは、大量の土器とともに石器、玉類も出土しており、ごく近辺に弥生時代中期の集落が存在したことは確実であろう。

29. ^{いまづ}今津遺跡 第3次調査

1. はじめに 今津遺跡は、明石川と榎谷川の合流部の東側の沖積地に位置している。これまでの調査で弥生時代中期の竪穴住居や木棺墓、土坑墓、壺棺墓、土坑、溝や古墳時代後期の大溝が検出されている。

今回の調査は、マンション建設に伴うもので、今津遺跡の南東端にあたり、東側には平安時代から弥生時代後期の複合遺跡である高津橋岡遺跡が立地する。また、南側には明石川流域で弥生時代中期の中核的な集落遺跡である新方遺跡が近接している。



2. 調査の概要 中世の遺物を包含する淡灰色シルト層を除去し、灰黄色シルト層の上面で中世の遺構面を検出した。検出した遺構は、掘立柱建物4棟と井戸1基、土坑4基である。

第1遺構面

掘立柱建物 4棟検出した掘立柱建物は調査区の中央に存在する。

- SB 01 SB 01・02は、建替えが行われた東西3間、南北2間の東西棟の掘立柱建物である。建替えに際しては、桁行の柱を梁行の方向に0.3m程度内側に立て直している。SB 02の北西隅の柱穴には、柱抜き後に古瀬戸の四耳壺 (fig. 169-13) を投棄している。
- SB 03 東西3間 (6m)、南北2間 (3.8m)の東西棟の総柱掘立柱建物である。西側の柱列が若干不揃いである。柱抜き後に須恵器椀 (fig. 169-9) を投棄している。
- SB 04 東西3間 (5.9m)、南北2間 (4m)の東西棟の掘立柱建物で、SB 01・02と規模はあまり変わらないが、柱穴が0.2mと小さく、柱列の通りも不揃いである。出土遺物に柱穴から須恵器椀 (fig. 169-8) がある。これらの掘立柱建物群の他に、東側にも柱穴が検出されており、調査区東側にも建物が存在する可能性がある。

構列 SB 01・02の方位とはほぼ同様で、東側と南側を面する様に構列が検出された。柱間距離

SA 01 は、0.7～0.9 mとややばらつきがある。SB 01・02 に伴う可能性があるが、出土遺物が少ないため断定できない。

井戸 SB 04 のすぐ西側で検出された。一辺 0.9 m の隅丸方形の掘形であるが、廃棄時に井戸 SE 01 枠を抜き取ったためか、大きく崩れている。遺構面から約 1.5 m 方形に掘り込まれており、井戸枠が存在していたと思われる。出土遺物はほとんどなく、わずかな須恵器、土師器片 (fig. 169-2) と、木製椀が出土した。詳細な時期を決定し難い。

土坑 SK 05 以外の 4 基の土坑は、調査区の南西隅で検出された。SK 01・02 は円形、SK 03 SK 01～05 は、長方形の浅い土坑である。SK 04 から土師器羽釜片 (fig. 169-12) がわずかに出土している。

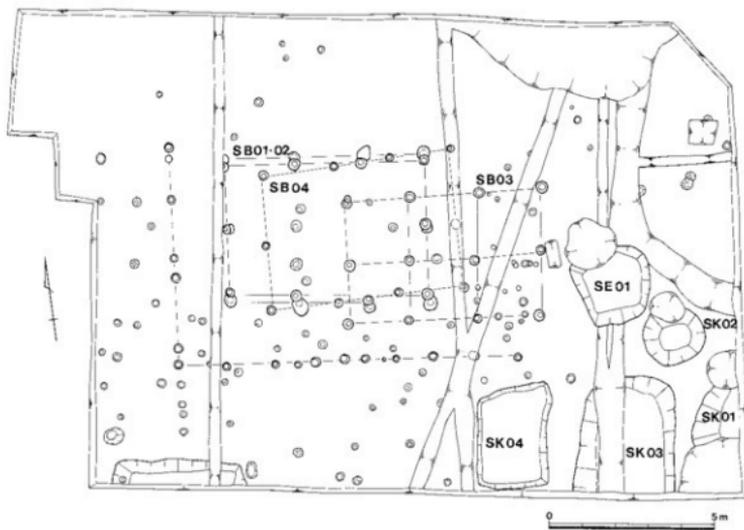


fig. 166 第1遺構面平面図

第2遺構面 第1遺構面のベース層である灰黄色シルト層は北東から南西にかけて徐々に厚く堆積 (5～15cm) している。これは、旧地形がこの方向に緩やかに傾斜しているためで、調査区の北東隅では後世の削平が著しい。

この灰黄色シルト層を除去すると、古墳時代後期の土坑や弥生時代中期の土坑が検出された。

土坑 SK 201 調査区の北東隅で検出された南北 2.7 m、東西 1.7 m の楕円形の土坑である。調査区の北東隅は後世の削平が著しく、この土坑の深さも 0.15 m と浅い。土坑の最下層から完形の短頸壺や長頸壺 (fig. 169-14・16)、頸部を欠損している埴瓶 (fig. 169-15) が出土している。これらの遺物は、6世紀後半のものと思われるが、調査区内でこの時期の遺構は、この SK 201 のみで遺物の出土もない。

土坑 弥生時代中期と思われる土坑を 7 基検出することができた。SK 202～SK 208 のいず

SK 202 れの土坑も出土遺物 (SK 202 fig. 169-18・19) は少なく、弥生時代中期でも詳細な時期は明らかではない。

SK 205 と SK 206 からは、石鏃などの製品は無かったがサヌカイトのチップやフレークが多く出土している。この他にも6基の土坑を検出したが出土遺物がなく時期は決定出来ない。

落ち込み SX 201 調査区の西端で検出した幅約2～5m、深さ0.2～0.5mの落ち込みである。遺構の大半は、調査区外に延びており遺構の性格は不明である。ただ調査区の北西端の状況から溝状の遺構の可能性もある。出土遺物には弥生土器の細片やサヌカイト剥片のほか、石廬丁 (fig. 168-17) の破片がある。



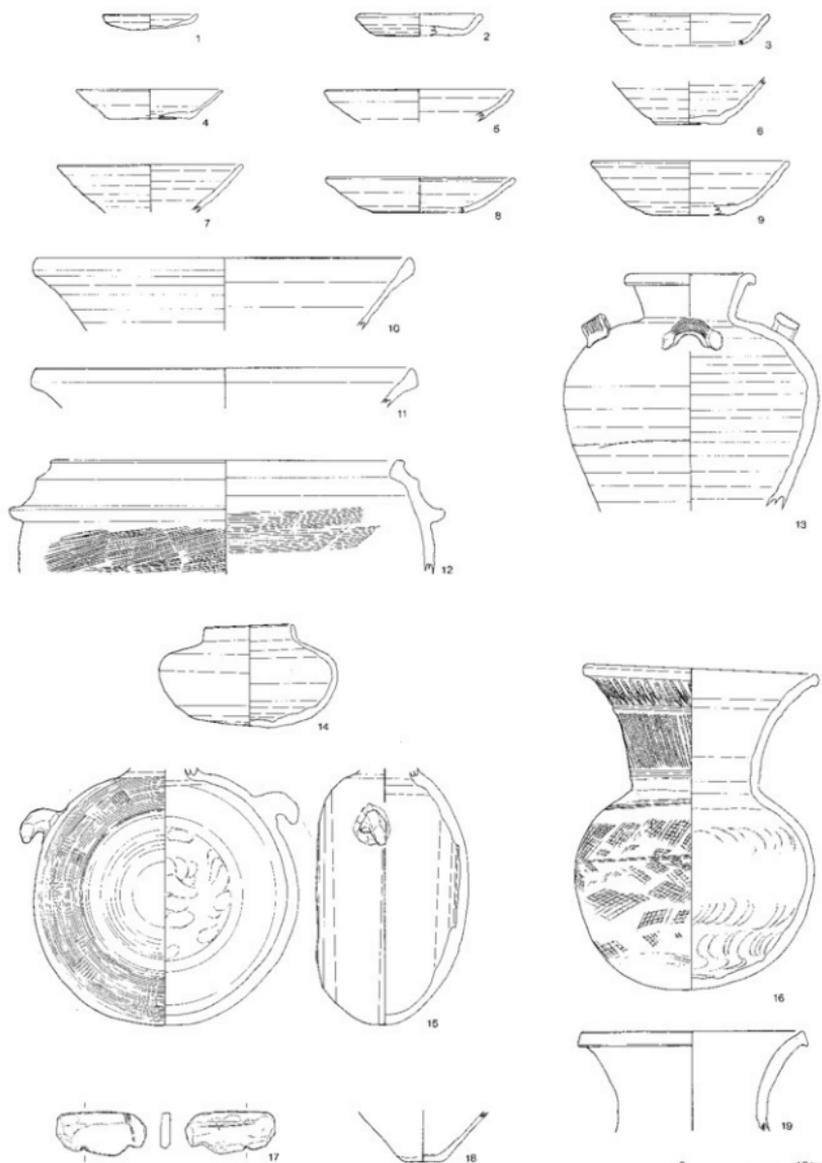
fig. 167 第1遺構面全景

3. まとめ

今回の調査では、第1遺構面で鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物や井戸、土坑などが検出され、また、その下層の第2遺構面からは、古墳時代後期と弥生時代中期と思われる土坑を検出した。

第1遺構面の掘立柱建物の時期は出土遺物が少なく、SB 03 が12世紀後半代、SB 01・02 が12世紀後半～13世紀、SB 04 は13世紀中頃～後半代と考えられる。今回検出された掘立柱建物は集落のなかの一部分に過ぎず、調査区の南側以外は、遺構が多く検出される可能性が高く、また、古瀬戸と思われる四耳壺は神戸市内でも出土例が少ない貴重な資料である。

第2遺構面では、住居址は検出されなかったが、古墳時代後期と弥生時代中期と思われる集落の存在を窺わせる遺構を検出した。



0 10cm
 fig. 168 出土土器実測図

30. 二ツ屋遺跡

1. はじめに 二ツ屋特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成3年度から本調査を実施してきている。その結果、弥生時代から中世に至る遺物や遺構が多数確認されている。今年度は区画整理事業に伴う、都市計画道路部分と区画街路部分について発掘調査を実施した。

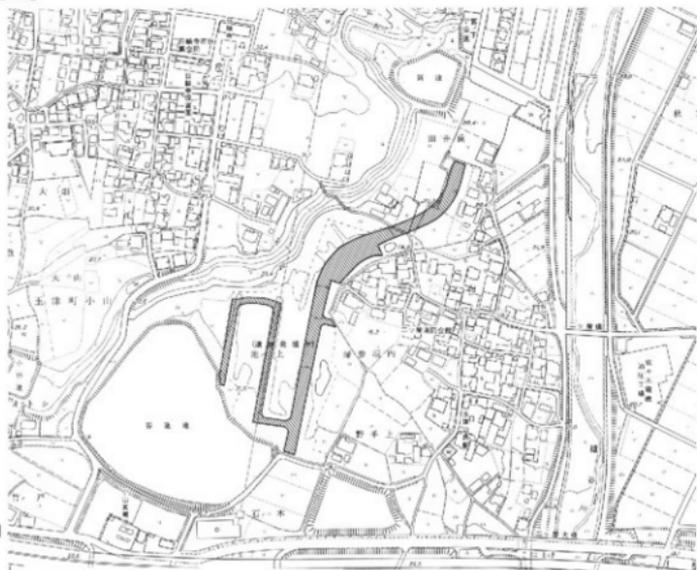


fig. 169
調査地点位置図
1 : 5000

2. 調査の概要 今回調査を実施した部分は、前年度に引き続きように調査地区割りを行っているため、2～9区、12区、14区と称する部分である。調査は2～6区が幅12m、その他の区は幅約6mで実施した。そして、重要遺構が検出された2区の中央部東側と4・5区については、部分的な拡張を行い調査を実施した。
- 2 区 調査区が南北に長いため、中央部付近で検出された河道で南北に分け、河道より北側を北地区、南側を南地区と呼称する。
- 検出した遺構は溝10条、河道1条、土坑1基、落ち込み2基である。遺構は主として北地区において検出し、南地区では溝を4条検出したにとどまる。遺構の時期については、弥生時代終末期～古墳時代前期にかけてのものと中世のものが存在するが、同一面で検出している。
- 中世 北地区で浅い土坑を1基検出したのみである。時期については、遺物が細片であるため特定することは難しいが、鎌倉時代前後の時期が考えられる。
- 古墳時代 弥生時代終末期から古墳時代前期の溝10条を検出した。

- SD 02 北地区で検出した溝 (SD 01・02) は南側で河道に取りつくものであるが、土層の観察からは河道がある程度埋没した段階で掘削されたものと考えられる。SD 02 は、調査地内でS字状に屈曲し、この屈曲部分で少量の遺物とともに、炭・灰の堆積が認められた。最下層からは古墳時代前期 (布留式併行期) の甕や板状の加工材が出土している。
- SD 07 南地区で検出した溝 (SD 07) は北側で河道に取りつくものである。SD 07 は、河道内で出土した井堰付近から南流するもので、井堰で堰き止められた水を流すための溝であった可能性が考えられる。
- SX 01 落ち込み (SX 01) は、調査地の西端で検出された溝状の落ち込みである。北端部が一段深く掘りこまれており、ここで湧水が認められる。この付近で古墳時代前期の甕が数点出土しており、水溜状の施設として利用されていたのではないかと考えられる。
- 河道 河道は最大幅約10m、深さ約1.0mである。埋土から土器の出土は少ないが、最上層から古墳時代後期の須恵器が出土しており、埋没した時期をあらわすものであろう。
- 井堰 河道の中央部には、最下層で井堰が出土した。この井堰は、縦杭を合掌型に組み合わせ、その中央部に横木を据える形態のものである。一部に原位置を保つものもあるが、基本的には倒壊したものが出土したと考えられる。一部遺存状態の良好な部分では、この縦杭の上面に、藁状の繊維束を敷いており、3回にわたって修復されていることが確認できた。この繊維束は、井堰の上流側のみ認められ、水の浸透を防ぐための施設と考えられる。このような施設は、市内の宅原遺跡や出合遺跡で出土した井堰でみられる状況ともよく符合するものである。この井堰内からは、主として弥生時代終末から古墳時代前期前半の土器が出土し、当該時期の井堰であると考えられる。



fig. 170 井堰縦杭検出状況

3 区 溝 9 条と浅い溝状の落ち込み 1 基を検出した。

第 1 遺構面 中世と考えられる遺構は、現在の条里地割りと方向を同じくする南北方向の溝で、5 条検出した。出土した遺物の細片から鎌倉時代頃の時期が考えられる。

溝 (SD 04・05) はほぼ同一方向に流れる溝である。SD 05 からは、平安時代前半段階の須恵器の坏身が 1 点完形品で出土しており、2 条の溝はいずれも平安時代前半頃の遺構と考えられる。

第 2 遺構面 溝 2 条と浅い落ち込み 1 基、土坑 4 基を検出したが、全体として遺構は希薄である。

溝 (SD 101) からは、弥生時代中期に遡るのではないかと考えられる寛が 1 個体分出土している。この遺構以外には、遺物が出土しなかったが、他の遺構も弥生時代に遡る可能性が考えられる。

4 区・5 区 検出した遺構は、掘立柱建物 6 棟、礎石建物 1 棟、池 1 基、土坑・溝・ピットなどである。これらの遺構の時期については、すべて平安時代末 (12 世紀後半) におさまるもので、短期間の間に廃絶していることが明らかになった。

掘立柱建物 6 棟と礎石建物 1 棟は、規則的に配置された建物群で、掘立柱建物 1・2 を母屋とし、「コ」の字形の建物配置を採用している。建物の切り合い関係などから 2 時期に分けることができる。

I 期は、北側に母家となる掘立柱建物 (SB 01) が、その東西にそれぞれ掘立柱建物 (SB 04・05) が配置される。そして、礎石建物 (SB 07) が西側の SB 05 の北側に配置されている。

II 期では、母家となる SB 01 が建て替えられた掘立柱建物 (SB 02) と、西側に SB 05・07 とが廃絶したあとに建てられた掘立柱建物 (SB 06)、東側の SB 04 との間に新たに掘立柱建物 (SB 03) が配置されたと推定される。

いずれの段階においても、「コ」の字形の建物群の中には池と庭を配置している。建物群の外には顕著な遺構は確認されていない。そして、4 区の南と 5 区の北にはほぼ平行する溝があり、この 2 条の溝の間は約 100 m で、建物群を区画する溝と考えられる。

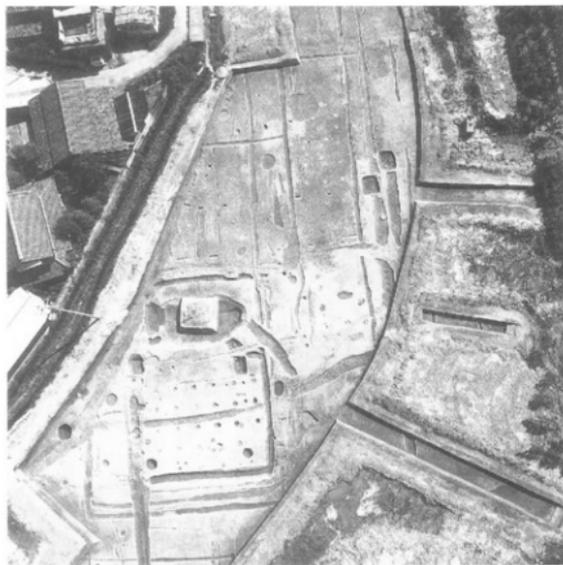


fig. 171 4・5 区航空写真

SB 01 この建物群の母家と考えられる建物で、南北4間（8.6 m）、東西6間（12.8 m）の総柱の掘立柱建物で、南東隅に1間の張り出し部がある。北と西は比較的深い溝で区画されるが、東側は新しく掘りこまれた溝（SD 01）のため、相当削平を受けている。南側の溝は細く浅いものである。この建物内の北西と北東の隅部で、直径1.5 m程度の円形の土坑（SK 05・11）を確認した。この土坑内から、土師器小皿の完形品を中心とする遺物が多量に出土しており、何らかの祭祀に関わる遺構ではないかと考えられる。また、建物内の西側で検出した土壌（SK 10）は木棺墓で、東西35cm、南北110 cmを測る。

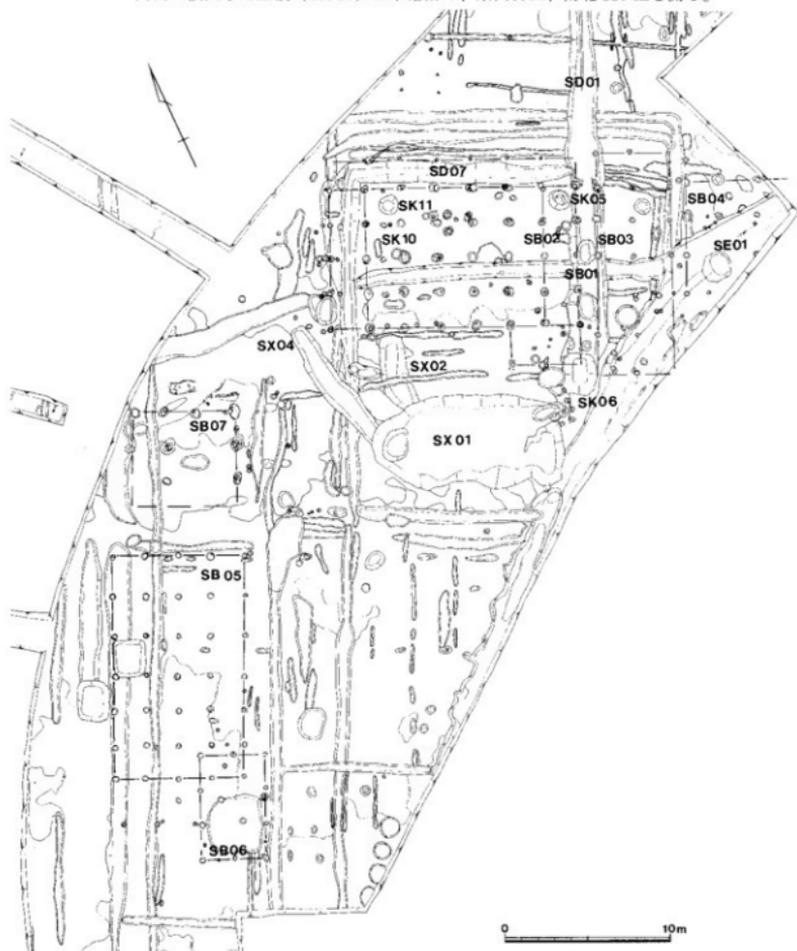


fig. 172 4・5区遺構平面図

底板と側板の一部が遺存していた。墓壇内には供献土器として、北側に須恵器小皿、南側に須恵器椀が置かれていた。

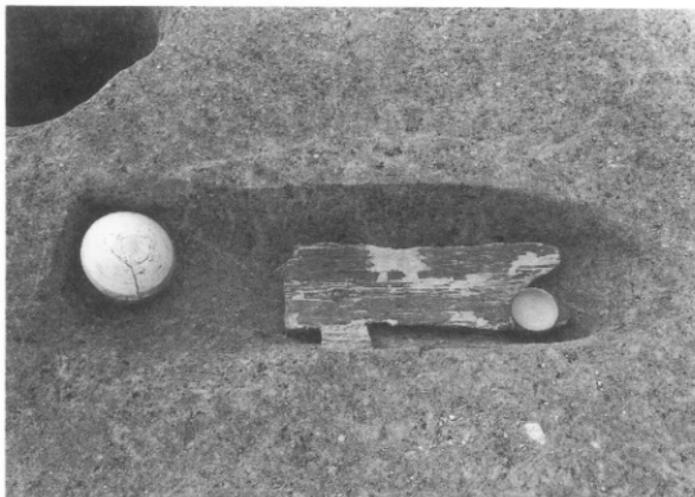


fig. 173 SK 10 検出状況

- SB 02 SB 01の東側の柱列の部分に溝(SD 01)を掘り、西へ1間ずらして建てられたのがSB 02である。この段階では、I期に認められた張り出し部や、周囲の溝は省略されている。しかし、建物規模は、南北4間(8.6 m)、東西6間(12.5 m)の規模を保っている。北側の柱列には建て替えに伴う柱穴が認められるが、他の部分では複数の柱穴がみられる部分は少なく、I期の柱穴を再度利用していることが考えられる。
- SB 03 SB 01の東側で確認した東西2間(4.4 m)、南北6間(13.5 m)の総柱の掘立柱建物である。この建物はSB 01に伴うと考えられるSD 01を切り込んでいることや、SB 01と同時に存在したのでは軒が接してしまうことから、II期としたものである。
- SB 04 SB 03のさらに東で検出したものである。東西2間以上(4.4 m以上)、南北3間以上(6.9 m以上)を測るが、調査区外に広がるため全体規模については不明である。井戸(SE 01)を囲むように建物があることから厨であった可能性がある。
- SB 05 「コ」の字形配置の西側列に位置する。東西4間(8.0 m)、南北6間(13.6 m)の総柱建物である。柱穴は母家と考えられるSB 01・02の半分程度である。この建物の東側には、遺構の空白地があり、庭と考えられる。
- SB 06 SB 05の南側で確認した東西2間(4.0 m)、南北3間(6.4 m)の小規模な掘立柱建物である。建物の南半に一辺3.5 m、深さ15 cmの方形の浅い落ち込みがあり、竈であった可能性がある。この建物の北西隅はSB 05と切り合い関係にあり、SB 05より後に建てられたものである。

SB 07 「コ」の字形配置の西側北端に位置する。東側には池が存在する。検出したのは東西

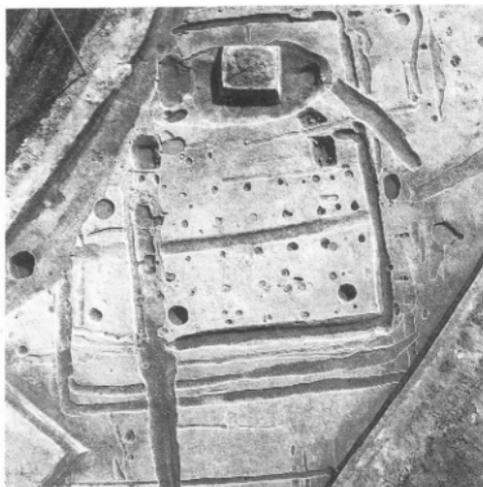


fig. 174 SB 01～03航空写真

3間(6.0m)、南北2間(4.2m)であるが、南側は削平を相当受けており、本来は東西3間、南北3間で、1間四面庇の建物であったと推定される。この建物の検出面では、拳大以下の円礫が南北8.5m、東西4mの範囲にわたって広がっていた(SK 01)。その中に瓦当を含む瓦片が比較的数量多く含まれていることから、この建物には当時、瓦が葺かれていたと考えられる。しかし、屋根全面を覆っていたと考えられるほどの量ではなく、軒先などの一部に使用されていたと考えられる。また、建物の北側には拳大の石が1列に並べられ、この周辺を整地していることから、方形の基壇が存在したと推定される。建物の検出面で認められた円礫も、このような基壇に関わるものの一部であったことが考えられる。

SX 01 「コ」の字形配置の建物群の内側に位置する池である。東西11m、南北6m、深さ70～80cmの楕円形である。埋土は2層に大別できるが、下層には粘土の堆積がみられ滞水していたことがわかる。この池の中からは、多量の遺物が出土し、墨書土器も少量みられる。

SE 01 SB 03の東側にある円形の井戸で、掘形の直径約1.6m、深さ1.2mである。板材で一辺1.2mの方形の井戸枠を組み、その下部に直径50cmの曲げ物を据えている。中からは須恵器、土師器、瓦、箸、漆塗りの木製杓、板材、角材等が出土している。

SK 06 長辺2.5m、短辺2.0m、深さ80cmを測る土坑である。南北両側で縦板が検出された。出土遺物には多数の須恵器・土師器とともに、須恵質の磚が出土している。

SD 01 南北方向の溝で、幅1.5～2.5m、深さ15～30cmである。この溝はSB 01の東側の柱穴列を削平していることから、SB 02と同時に存在し、雨落ち溝としての機能を果たしていた可能性がある。溝内からは多数の須恵器、土師器、瓦や拳大から人頭大の礫が出土している。

第2遺構面 第2遺構面は、4区で調査を行ったが、北に行くにつれて遺構面は不安定なものとなっている。遺構は、調査区の南端で東西方向の浅い落ち込みと河道を検出したのみである。いずれも出土遺物がなく、時期については明確にすることはできない。

6区 調査区北端で、掘立柱建物1棟を検出した。2間×3間分を検出したが、調査地区外にひろがるため規模については不明である。この建物周辺からは遺物がまぎらまぎら出土しており、この建物の廃絶した時期を示すものと考えられる。これらの遺物は、平安時代末頃のもので、4・5区で検出した建物群とはほぼ同時期かやや新しいものである。

南地区のはほぼ中央で、幅5mを測る南北方向の溝を検出した。埋土の最下層から、平安時代後半の土器が出土している。現存する条里地割りのやや西側にあたるが、方位はほぼ同一で、条里に伴う溝であった可能性も考えられる。

7区 不定形の浅い落ち込み2基を検出したのみである。遺物の出土はなく、時期については明確ではない。

第1遺構面

第2遺構面

2条の河道を検出した。東側で検出した河道(SX01)は、2区の中央部で検出した河道につながると考えられる。古墳時代の遺物が少量出土したのみである。西側で検出した河道(SX102)からは、古墳時代前期(布留式土器併行)の遺物がまとも出土している。中には小型精製の鉢形土器や小型丸底壺なども含まれており、良好な一括土器である。

第3遺構面

小ピット2個を検出したのみである。遺物の出土はまったく無く、時期については明確でない。

8区・9区 9区で溝を数条検出したのみで、遺物も少量である。奈良時代の遺物を出土するものもあるが、多くは平安時代後半～末のものである。

第1遺構面

第2遺構面

8区で、古墳時代前期の溝を確認している。この溝から、出土する土器は体部に穿孔が認められ、水に関わる祭祀に使用されたものであろうか。8区の北側で検出した河道は新旧2条が認められ、古いものは弥生時代の遺物が出土している。

その他の溝については、出土遺物が少なく時期については不明である。

10区・11区 10区では、遺物包含層から瓦片が比較的多く出土したが、顕著な遺構は検出できず、浅い溝状の遺構を検出したのみである。この遺構には黒色シルトの堆積がみられ、自然の窪地に堆積したような状況であった。遺物は全く出土していない。

第1遺構面

11区では、溝2条と土坑・ピット4か所を検出した。遺構内から遺物が出土しなかったため、時期については不明である。

第2遺構面

12区 丘陵の裾部に設定した東西方向の調査区である。浅い溝状の遺構や土坑などを検出したのみである。いずれも埋土は黒色シルトであった。遺物はまったく含まれておらず、時期については不明である。

14区 第1遺構面では、4区で検出した溝(SD04・05)の続きを検出した。埋土から平安時代の遺物が出土している。第2遺構面では、3条の溝状遺構を確認したが、遺物が含まれていないため、時期については不明である。

3. まとめ 今回の調査で明らかになったことは、以下のとおりである。

- (1) 2区では弥生時代終末から古墳時代前期と考えられる合掌型の井堰が河道内が出土した。この井堰から引水したと推定される溝を検出しており、この溝の下流部には水田などが存在する可能性が考えられる。
- (2) 4・5区で検出した遺構は、平安時代末(12世紀後半)の掘立柱建物6棟、礎石建物1棟、池1基、井戸1基の他、溝、土坑、ピットなど多数である。

建物群は、「コ」の字形に配置され、掘立柱建物(SB01・02)を母家とし、西側に礎石建物1棟と掘立柱建物2棟を、東側に掘立柱建物2棟を配置する。そして、この建

物群の内側には池や庭を配置している。

礎石建物（SB 07）は、削平され遺存状況は良好ではないが、検出面で軒平瓦を含む瓦類がまとまって出土している。この建物の性格は、阿弥陀堂などの持仏堂であったと考えられる。

このような建物群は、当時の一般的な民家とは考えにくいもので、地方貴族などの極めて有力な人物の邸宅であったと考えられる。このことは、平安時代末の地方支配者層の生活を復元するうえで貴重な資料である。

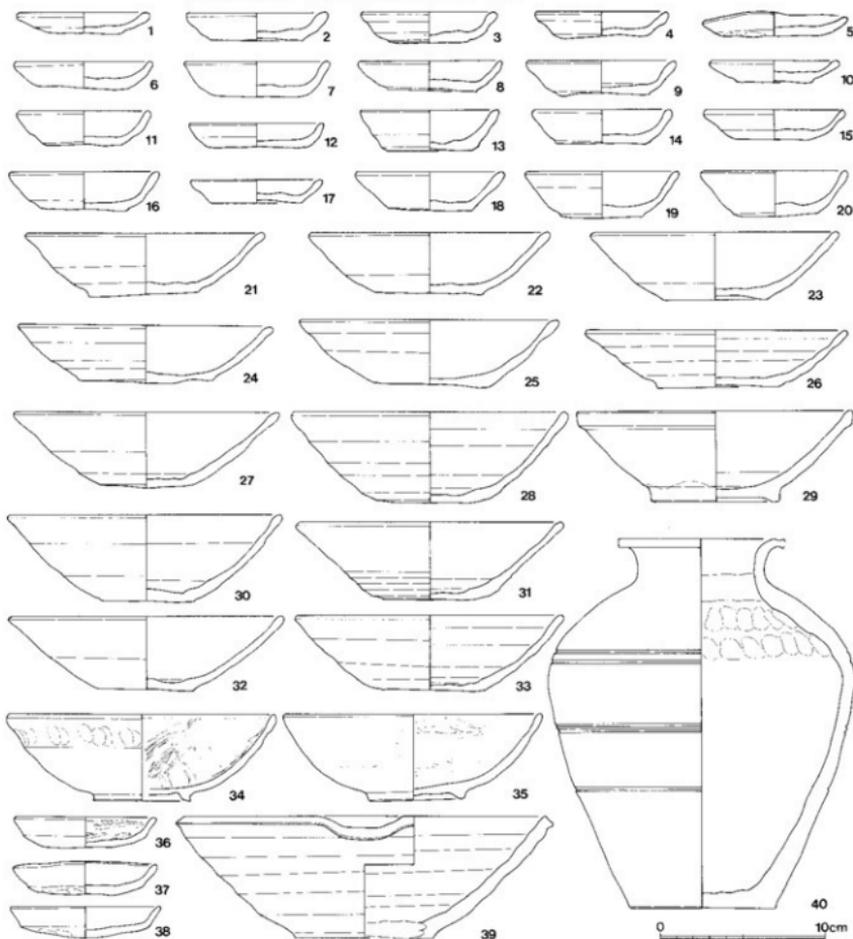


fig. 175 出土土器実測図 (1, 2, 6, 11, 16, 21: SB 01 12: SB 02 17: SB 04 4, 9, 14, 25, 28: SK 06 19: SK 10 5, 10, 15, 20, 23, 26, 30, 32, 34, 36, 37, 38, 39, 40: SD 01 24, 31, 33: SE 01 3, 8, 13, 18, 22, 27, 35: SX 01 29: SX 02)

たまつ たなか
31. 玉津田中遺跡 第6次調査

1. はじめに 玉津田中遺跡は、明石川中流域左岸の洪積段丘から沖積地に広がる遺跡である。発掘調査は、昭和57年～平成3年にかけて兵庫県教育委員会によって実施されており、縄文時代から鎌倉時代の遺構が検出されている。今回調査対象地の平野地区は、県営平野地区土地改良事業に伴い、昭和63年度に実施された分布調査の結果、埋蔵文化財の存在が明らかになった遺跡である。平成元年度以降、試掘調査及び本調査が実施されており、弥生時代前期・後期、古墳時代中期・後期の集落址・流路とこれらの周囲に広がる水田址との関わりが徐々に解明されつつある。



fig. 176
調査地点位置図
1 : 5000

2. 調査の概要 11トレンチ北地区は本事業地を南北に通る幹線排水路予定地で、幅約5m、全長約100mの調査区で、11トレンチ中央区と農道をはさんで北側に接している。
- 11トレンチ
北地区
- 調査の結果、4面の遺構面を確認し、さらに、第4遺構面以下の層についても、幅2mの断ち割りトレンチを設定して、下層の埋蔵文化財の有無について調査を実施した。11トレンチ中央区第5遺構面で確認された、縄文時代後期～晩期の遺物を包含する黒灰色シルト層と同一層は存在するものの、遺構・遺物は全く確認できなかった。
- 第1遺構面
- 調査区内で「L」字形に走る幅3m、深さ40cmの溝（SD 09）と調査区に直行する幅1m、深さ25cmの溝（SD 10）とピット3か所を確認した。SD 09の埋土から鎌倉時代の須恵器・土師器・獣歯・北宋銭（祥符元宝、1008年初鑄）が出土している。
- 第2遺構面
- 水田区画10区以上と幅31mに及ぶ流路を確認した。水田の区画に規制性は見られず、水口等の施設も確認できなかった。いずれの水田区画も畦畔が調査区外に延びるため、一区画の面積は不明である。流路の南岸部では畦畔の乱れが顕著である。水田耕上層は暗褐色

色シルト混じり極細砂である。流路北側肩部には中型の畦畔が作られている。周辺の層位からみると、古墳時代のものであろう。

第3遺構面 弥生時代中期と考えられる流路と、これをはさんで営まれた水田址（第2水田面）を確認した。確認した畦畔を伴う水田は、13区画以上で、区画にあまり規則性は認められない。いずれも畦畔が調査区外に延びるため、一区画の面積は不明である。水田耕土層は炭粒を多く含む黒灰色極細砂シルトである。なお、流路より北側の水田面では、人間の歩行が判別できる足跡を14歩確認した。また、流路より南側の水田面では稲株の痕跡と考えられる砂の詰まった穴（直径5cm）を多数確認した。

第4遺構面 調査区中央部分で南流する流路（幅約44m、深さ2m以上）を、また、調査区南端では溝状遺構を1条確認した。弥生時代前期に属するものである。

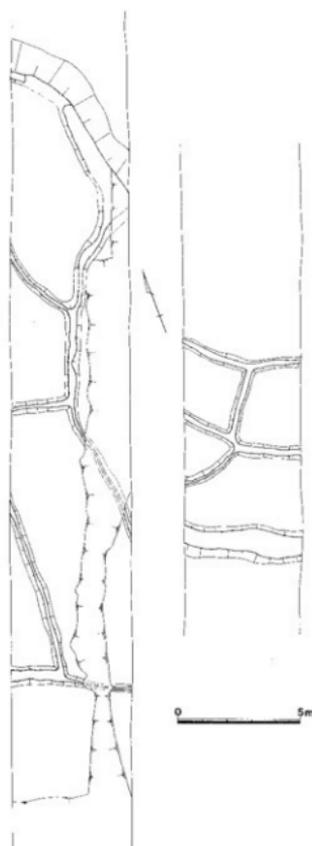


fig. 177 11トレンチ中央区第2遺構面平面図



fig. 178 11トレンチ北地区第3遺構面平面図

- 11トレンチ 11トレンチ中央区は本事業地を南北に通る幹線排水路予定地で、幅約5m、全長約100mの調査区である。
- 中央区
- 第1遺構面 13世紀の遺物を含む溝(SD 07・08)2条を検出した。これらの溝は、トレンチとほぼ同一方向に並んでおり、幅1~1.5m、深さ30~50cmで北から南へ流れていたと思われる。
- 第2遺構面 古墳時代後期の遺物を含む流路(SD 17)1条を検出した。この流路は、トレンチを東西に横切っており、最大幅14m、深さ60~80cmである。
- 第3遺構面 弥生時代中期の遺物を含む溝5条(SD 12~16)と土坑4基(SK 04~07)、落ち込み1基(SX 03)を検出した。
- SD 12は、東西に流れる幅約80cm、深さ約10cmの溝である。溝底のレベルから、西へ流れていたと思われる。SD 13は、南北に流れる幅約2m、深さ約70cmの比較的大きな溝である。溝底のレベルから北へ流れていたと思われる。SD 14は、SD 13から西へ分岐した溝であり、西方へ流れていたと思われる。SD 15は、南北に流れる幅50~80cm、深さ約10cmの溝である。流れていた方向は、高低差がほとんどなく不明である。SD 16も、SD 13から西へ分岐した溝であり、西方へ流れていたと思われる。
- 土坑は、いずれも遺物がほとんど確認されず、その性格は不明である。
- 第4遺構面 遺物はほとんど出土しなかったが、これまでの調査の結果から、弥生時代前期に相当する遺構面である。遺構は、土坑1基(SK 08)と落ち込み1基(SX 04)を検出した。いずれの遺構も第3遺構面の溝(SD 13)で半壊していた。
- 第5遺構面 第4遺構面終了後に調査区西壁沿いで断ち割り調査を行った結果、黒色シルト層及び淡黒色シルト上面より縄文時代晩期の土器片が出土したため、全面に拡げて調査を行ったものである。遺構は、東西に流れる流路と不明遺構2基(SX 05・06)のみである。流路からは、若干の縄文土器片と流木が出土した。SX 05は、緩く窪んだ遺構で、縄文時代晩期の土器片とサヌカイトのフレイクが出土した。SX 05の北へ1mほどはなれた地点(北群)では、縄文時代晩期の土器片とサヌカイト製の石鏃やフレイクが出土した。

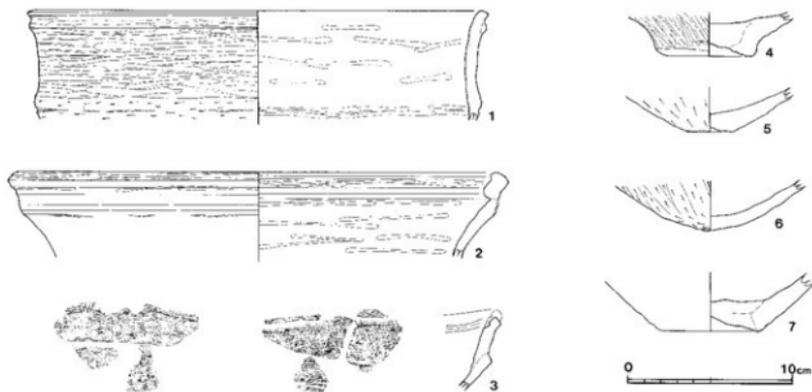


fig. 179 11トレンチ中央区出土土器

11トレンチ 南地区 11トレンチ南地区は本事業地を南北に通る幹線排水路予定地で、幅約5m、全長約100mの調査区である。

弥生時代前期前半、弥生時代中期、鎌倉時代以降の3時期の遺構面を確認した。遺構は各遺構面ともに調査区の南半で主に検出した。

第1遺構面 調査区南半でピット34か所と落ち込み1基を確認した。ピットのうち、2基について柱痕を確認できたものの、建物を構成するには至らない。鎌倉時代以降の遺構面と考えられる。

第2遺構面 面的な検出ができなかったが、弥生時代中期と考えられる水田に伴う水畦畔1条（高さ20cm、幅1.7m）と小畦畔2条（高さ10cm、幅30cm程度）を確認した。畦畔間の距離は、それぞれ約5.5mである。水田土壌は暗灰褐色シルト質細砂で、後述する第3遺構面の遺物包含層にあたり、微高地の縁辺部での小区画の水田経営が推定できる。

第3遺構面 調査区南半で灰色系の安定した砂礫を基盤層としており、弥生時代前期前半の遺物を含む溝6条（SD 01～04・06・11）、土坑3基（SK 01～03）とピット39か所を確認した。これらの遺構群の北側の調査区では、基盤層が青灰色細砂に変化しており、微高地の後背湿地的な部分で、当該期の遺構は全く形成されなかったものと考えられる。

確認したそれぞれの溝の規模は、下表のとおりである。

遺構名	SD 01	SD 02	SD 03	SD 04	SD 06	SD 11
最大幅	3.5 m	2.4 m	2.4 m	8.0 m	2.6 m	1.0 m
最大深さ	0.8 m	1.2 m	0.15 m	0.35 m	0.70 m	0.15 m

これら6条の溝は、ほぼ並行して流れているように見えるが、最も深いSD 02の下層から出土した弥生土器は、削り出し突帯第I種を含んでおり、他の溝のもの（削り出し突帯第II種少条）よりやや古い要素をもち、今後それぞれの詳細な出土遺物の検討が必要である。

その他の遺構については、おおむね弥生時代前期前半のものと考えている。SK 01からは、壺形土器の上半部が出土している。直口気味に延びる口縁部に、貼り付け突帯と円形浮紋によって加飾された張りの強い体部からなるものである。弥生時代前期後半のものであろう。

第3遺構面以下の層については、幅2mの断ち削りトレンチを設定し、下層の埋蔵文化財の有無について調査を実施した。11トレンチ中央区第5遺構面で確認された縄文時代後期～晩期の遺物を包含する黒灰色シルト層と同一層は存在するものの、遺構・遺物は全く確認できなかった。

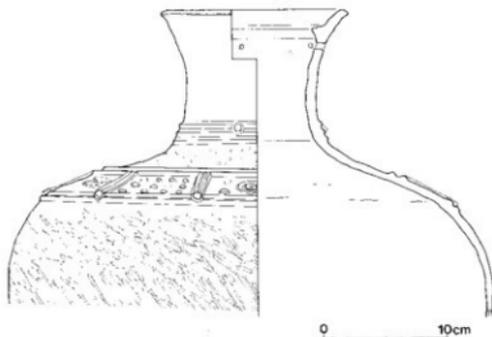


Fig. 180 第3遺構面 SK 01 出土土器

12トレンチ 12トレンチは先に述べたC地区内に敷設される第31号支線排水路子定地で、幅約2 m、全長約80 mのトレンチ調査を実施した。

遺構は、竪穴住居4棟（SB01～07）、土坑7基、溝8条、不明遺構5基、ピット13か所を検出した。

SB01 北西隅を攪乱により一部を失っているが、一辺約7 mの方形の竪穴住居である。周壁に沿ってはほぼ全周する幅約1.5 mのベッド状遺構が巡っており、南辺の中央には長径約1 m、短径約70 cm、深さ約40 cmの土坑がある。主柱穴は、ベッド状遺構の内側に接した四隅に約4 m間隔で確認された。ベッド状遺構は、地山を掘削した土を盛土して構築されている。周壁溝は、ベッド状遺構の外側と内側の段部に巡っていたようである。中央土坑は直径約50 cmで、その周囲で壺や甕を据えたと思われる窪みを検出した。床面および土坑内から弥生土器を多数検出した。

SB05 西側半分以上をSB02・03で失っているが、直径約8 mの円形の竪穴住居で、幅約1 mのベッド状遺構を確認した。主柱穴は5本検出したが、その配置から本来6本柱の竪穴住居と思われる。また、床面の中心には直径約2 mの中央土坑をもっている。この中央土坑には、幅約10 cm、高さ約3 cmの周堤帯が東側に巡っており、周堤帯の内側を約5 cm窪めて中心に直径約80 cm、深さ約40 cmの土坑を設けているものである。この住居では、大量の炭化木材と焼け土が、床面よりやや浮いた状態で全面から検出されたことから焼失住居と思われる。

SB02 南辺をSB03によって失われているが、東西約6 m、南北約5.5 mの方形の竪穴住居である。周囲には周壁溝が

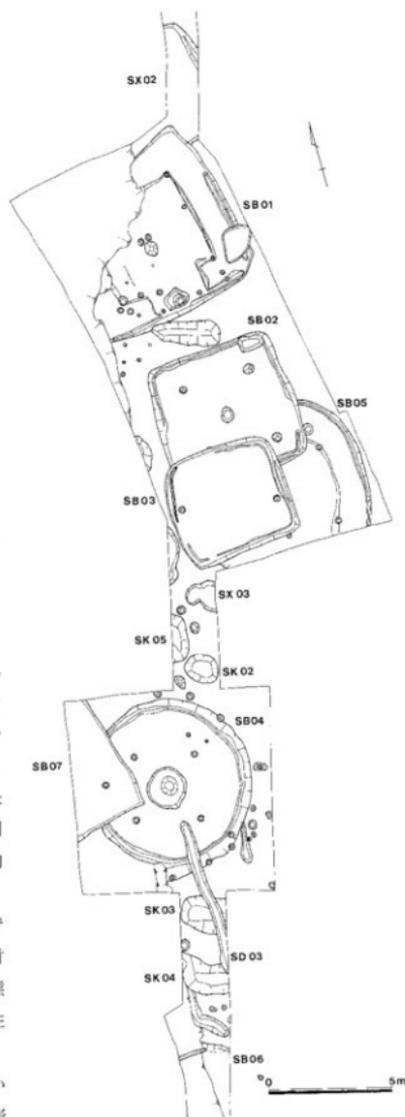


fig. 181 SB01～07平面図

巡っており、北東隅では、東西約1m、南北約50cmの土坑が周溝を切るように検出された。主柱穴は4本、住居址の中心では直径約60cmの中央土坑を検出した。

SB 03 東西約5m、南北約4.5mの方形の竪穴住居である。周囲には周壁溝が巡っており、主柱穴は2本で東西辺のほぼ中心に1本ずつ検出された。

SB 07 大半が調査区外へ広がっているので正確な規模と平面の形は不明であるが、検出した部分から一辺5mほどの方形の竪穴住居と思われる。主柱穴は、1本だけ検出したが、周壁溝などは検出されなかった。

SB 04 直径約7mの円形の竪穴住居である。主柱穴4本と中央土坑を検出した。この中央土坑は直径約1.5mで、深さ約5cmから中央でさらに直径約80cm、深さ約20cmの二段落ちの土坑となっている。周壁溝は全周している。

SB 06 現代の水路の攪乱を受け大半を失っており、規模や平面の形などは不明である。かろうじて、周壁溝の一部を検出したのみである。

これら7棟の時期は、SB 04・05が弥生時代後期、SB 02・07が庄内式期、SB 01・03が布留式期の古段階である。

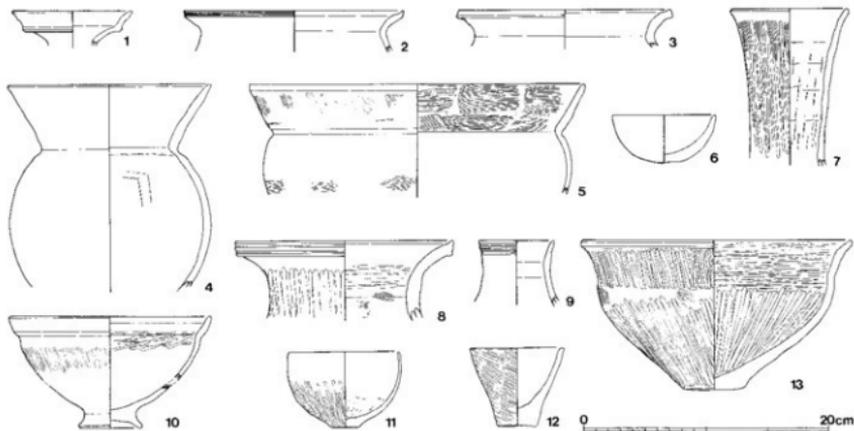


fig. 182 12トレンチ出土土器実測図(1~3:SB 02 4~6:SB 03 7~13:SB 05)

3. まとめ

今回の調査では、かなり広範囲に試掘調査を実施できたことと、異なった条件の地区を調査することによって、玉津田中遺跡の範囲を明らかにし、水田と集落の存在形態の実体に迫ることができた。

11トレンチ中央区の調査によると、明石川とそれに伴う流路の氾濫を受けやすい不安定な地域については、水田が営まれていることが確認された。また、試掘調査の結果では、そういった後背湿地の中にも微高地や自然堤防を利用して、集落が存在することが確認された。12トレンチの調査では、安定した洪積段丘の上に営まれた弥生時代後期から古墳時代初頭の集落址が検出された。この集落址は、平成元年に、兵庫県教育委員会が唐土地区で発掘調査を実施し、検出された集落址と関連が深いものと思われる。

32. 西神ニュータウン内 第65地点遺跡

1. はじめに 西神ニュータウン内第65地点遺跡は、昭和49年度における試掘調査によって、堅穴住居
経過 1棟、焼土坑などが検出され、弥生時代の集落が存在することが確認された。

この試掘調査の結果より、当遺跡は緑地として保存されるようになっていたが、計画上
削平せざるをえない部分が存在し、未調査の部分に関して遺跡の範囲を確定するために昭和
58年度に第2次の試掘調査を実施した。

その結果、遺跡の範囲が確定され、削平される部分をA～F地区に地区分けした。そして、
昭和59年度から本調査を開始し、昭和59年度にA・B・C・E地区、昭和61年度にC
地区、平成元年度にA地区を神戸市教育委員会が実施し、平成2～3年度にF地区を神戸
女子大学遺跡調査会が実施した。これまでに、弥生時代中期後半の堅穴住居・通路状遺構・
地形整形遺構・焼土坑・土器棺墓・銅鐸鋳型未製品などが検出されている。

そして今回、平成3年度から4年度にかけてD地区（約10,750㎡）の調査を実施する
こととなった。

立地 当遺跡付近一帯はすでに西神ニュータウンとして開発されている、明石川と榎谷川に挟
まれた、丘陵上の谷間に存在し、標高102mを最高所として80m以上に集落が営まれている。
榎谷川の沖積地との比高差約40m、直下の谷筋との比高差約25mのところに位置する。
しかし、榎谷川本流には面しておらず榎谷川の支流を遡った所に位置し、眼下には榎谷川
流域は望めないが、榎谷川下流域の明石川との合流点付近から下流にかけては見渡すこと
ができる。



fig. 183
調査地点位置図
1 : 5000

2. 調査の概要 今回の調査ではD地区を中央尾根鞍部を境に北区、南区に分け、それぞれの区内を頂上部・東斜面・西斜面・南斜面と区分けを行った。またグリッドは、中央尾根方向を軸として10mピッチで調査区の北東隅から西へ1～11区、南へA～S区まで分け、それぞれのグリッドを「A-1区」のように名付けて遺物等を取り上げた。

北区頂上部 北区頂上部では、弥生時代中期後半の竪穴住居1棟（SB01）を検出した。

SB01 尾根上の標高97m付近には約70m²の平坦地があるが、その平坦地の縁辺の尾根が狭くなる地点に、SB01は造られている。このSB01は、当初一辺約6.5m～7.0mの円形に近い隅円方形の竪穴住居（SB01-1）であったものを、南西方向に約1mにずらして、直径約6.2mの円形の竪穴住居（SB01-2）に建て替えている。

SB01-1の主柱穴は4本で、中央には炉と考えられる焼土坑が存在する。北側の壁際には周壁溝が造られているが、南側の壁はSB01-2を造る際に崩されて残っておらず、周壁溝も造られていなかったようである。西側と東側は、斜面に流出している。

SB01-2の主柱穴は4本の柱に、棟持柱を2本加えた計6本で、中央には炉と考えられる焼土坑が2基存在する。北側の壁はSB01-1を埋めて造られており、壁際には周壁溝が造られているが南側には周壁溝は存在しない。西側と東側は、斜面に流出している。中央土坑の横には、チャート製の台石を据えている。

SB01-2の埋土内には炭や焼土が多く含まれており、床面は焼けている部分もあり、その上には炭・灰が広がって、炭化材も出土している。

遺物としては、弥生土器片、サヌカイト製の石鎌・石錐やサヌカイトのチップ、フレイク、砂岩製の砥石、先述のチャート製の台石等が出土している。

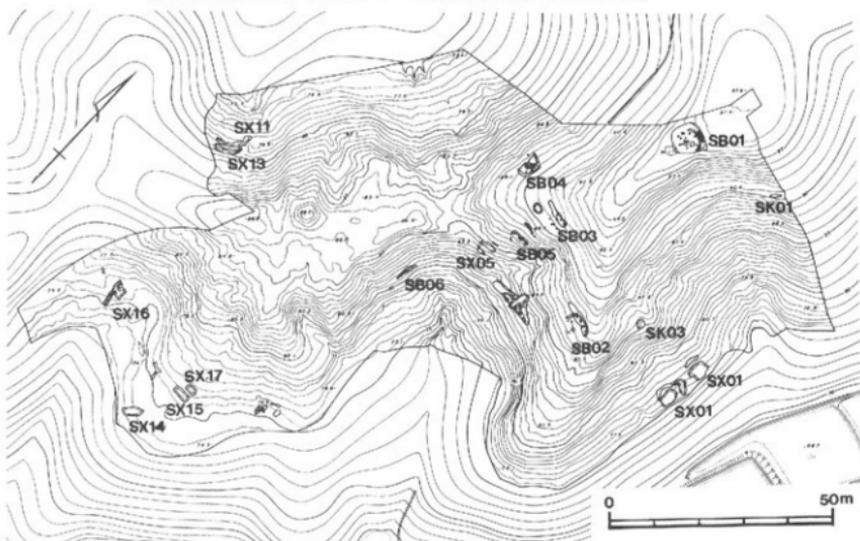


fig. 184 調査地区地形図

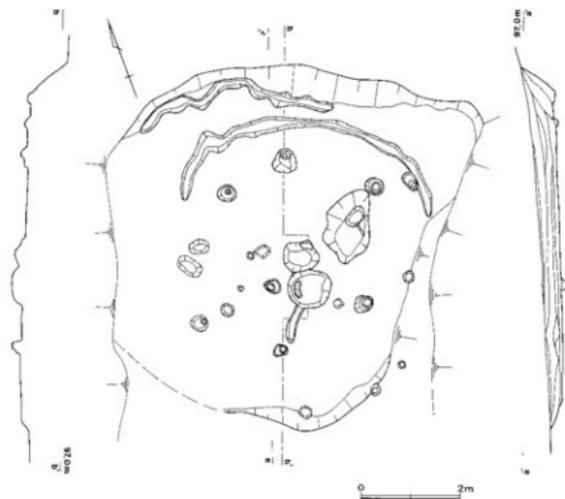


fig. 185
SB 01 平・断面図

北区東斜面 北区東斜面では弥生時代中期後半の土坑1基 (SK 01)、12世紀の焼土坑2基 (SX 01・02)、時期不明の焼土坑2基 (SK 02・03) を検出している。

SK 01 SK 01 は長さ 3.0 m・幅 1.0 m・深さは 30 cm の不定形の土坑で、東側は、かなり流出している。土坑の底から大型で厚手の壺の胴部の破片が出土していることから、土器棺墓の可能性もある。

SK 02 SK 02 は直径 1.2 m の焼土坑で、弥生時代の遺物を含む層を切り込んで造られていることから、弥生時代以降であることは明らかであるが、それ以上は判明していない。

SK 03 SK 03 は直径 2.0 m の焼土坑で、東側は流出している。遺物はなく時期は不明である。

SX 01 SX 01 は 4.2 × 3.2 m で斜面に造られた長方形の焼土坑である。上方約 1 m には、等高線に沿って幅 70 cm の溝 (SX 01 - SD) が長さ 4 m にわたって掘られている。土坑内の埋土には炭が充満しており、床面は焼けている。炭層と焼土面は各 2 面あり 2 度の焼成があったことがわかる。床面の角度は 5 度を測る。土坑の北東隅では 2 次焼成面で炭化材が組まれた状態で出土している。

SX 02 SX 02 は 4.0 × 2.6 m の斜面に造られた長方形の焼土坑で、上方から土坑の両側にかけて、幅 50 ~ 150 cm の溝 (SX 02 - SD) が土坑を囲むように掘られている。土坑内の埋土には炭が充満しており、床面は焼けている。SX 01 と並ぶように造られており、この 2 つの土坑は同時期のものと考えられる。ただし、SX 02 は焼成面は 1 面のみで、床面は、凹凸が著しい。床面の傾斜角度は 20 度を測る。

遺物は、SX 01 からは時期の判るものは出土していないが、SX 02 - SD から 12 世紀の須恵器碗の破片が出土している。

遺物 北区東斜面では、流土中から弥生時代中期後半の土器が多く出土している。特に SB 01

の下方にあたるC-6・D-6区付近で遺物の出土量が多い。石器は、柱状片刃石斧が2点、石錘1点、砥石3点が出土している。また、A-5・B-5区付近では8・9世紀の須恵器杯・甕の破片が多く出土している。

北区西斜面 北区西斜面では弥生時代中期後半の竪穴住居1棟(SB04)、時期不明の焼土坑1基(SX06)を検出している。

SB04 SB04は北区東斜面と西斜面を分ける尾根稜線から少し南側に下った斜面に造られた一辺5.3mの隅四方形の竪穴住居である。西側は斜面に流出している。東側の壁は高さ80cmを測り、壁際には周壁溝を巡らす。建物の中央に焼土坑があり、その土坑内には炭層が2層確認される。この土坑から周壁溝に、2本の細い溝が繋がっている。この中央土坑に接して長楕円形の土坑が存在する。この土坑の壁も焼けている。主柱穴は3本を確認したが、4本柱の建物と考えられる。

SX06 SX06は、直径1.5mの焼土坑である。この土坑は、弥生土器を含む層を切り込んで造られているが、土坑内から遺物は出土せず、時期は不明である。

遺物 北区西斜面では、流土中から弥生時代中期後半の土器が多く出土している。特にSB01の下方にあたるE-8区付近と、SB04付近のG-8区で特に多い。また、砥石2点が出土している。また、II-10区で7世紀末の完形に近い須恵器短頸壺が出土している。

北区南斜面 北区南斜面では弥生時代中期後半の建物3棟(SB02・03・05)、地山整形遺構2基(SX05・10)、土坑1基(SK04)を検出している。

SB02 SB02は北区と南区を分ける尾根稜線から少し南側に下った斜面に造られた竪穴住居である。南側は斜面に流出している。北側の壁は深さ70cmを測り、壁際には周壁溝を巡らす。周壁溝は一辺5.5mで隅四方形に巡るが、西側の壁は無く、周壁溝を切る柱穴もあることから建て替えが行われたと考えられる。建物の中央と考えられる付近に土坑があり、底には炭が溜まっていた。若干、床面の盛り土が残っていたが、それを取り除いた地山面では、焼けた部分が存在した。このことから住居を造る前にこの付近を焼いたものと考えられる。

遺物は、土器は小さな破片が少し出土したのみであるが、サヌカイト製の石鏃6点・石錘3点とサヌカイトの剥片が多数出土している。また西側の周壁溝から砥石が出土している。

SB03 SB03は北区南斜面に造られた建物で、斜面を削り込んで平坦地を造りそこに建てられている。主柱穴は6か所で1間×2間の平地式住居または高床建物の可能性が高い。柱間は南北は1.6～1.8m、東西は1.3～1.5mを測る。すぐ西側に1.8×2.5m、深さ35cmの

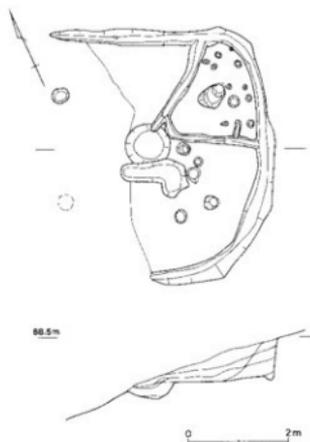


fig. 186 SB04 平・断面図

楕円形の土坑 (SK 04) を伴う。

- SB 05 SB 05 も北区南斜面に造られた建物で南半分はほとんど流出している。壁際に周壁溝を造っている。支柱穴は3か所検出したが、この3本が1.5～2.0 m間隔で一列に並んでいることから、SB 03 のような6本柱の建物になる可能性がある。このSB 05 のすぐ上には地山を削り込んで、狭い平坦地をつくり、そこに小ピットが並ぶ遺構が存在する。これはSB 05 に伴う欄干か、土留めの杭列と考えられる。この住居のすぐ西側から柱状片刃石斧が1点出土している。

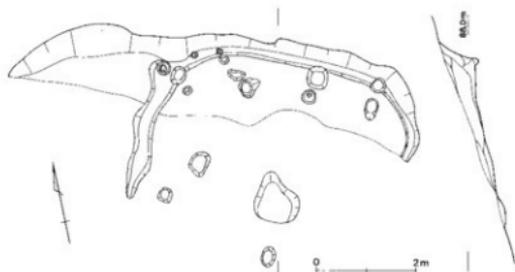


fig. 187 SB 02 平・断面図

- SX 05 SX 05 は幅1.5 m、長さ4.2 mの地山整形遺構で土器が集中して出土した部分があった。床面には焼けた部分が存在する。すぐ上には細長く地山を整形した遺構と、すぐ下に土坑3基を伴う。
- SX 10 SX 10 は幅3.5 m、長さ12 mの地山整形遺構で、平坦面に幅90 cm、深さ30 cmの溝を伴う。北区南斜面からは、G-5～I-6区の谷筋から弥生時代中期後半の土器が多く出土した。これらの土器は上記のSB 03～SX 10 から流れ込んだものと考えられる。同じ谷筋からは柱状片刃石斧が1点、石錘1点、砥石2点、サヌカイト製削器などの石器が出土している。
- 南区頂上部 南区頂上部では遺構は確認されなかった。遺物はサヌカイトの大型の剥片が2点出土している。
- 南区東斜面 南区東斜面では、弥生時代中期後半の竪穴住居1棟 (SB 06) を検出した。
- SB 06 SB 06 は、南区東斜面の標高80 mに造られた竪穴住居である。ほとんどが流出しており、西側の一部が残存しているのみである。壁際には周壁溝が造られている、柱穴は2か所確認したが、支柱穴になるかどうかはわからない。
- 南区西斜面 南区西斜面では、弥生時代中期後半の地山整形遺構2基 (SX 11・13)、中世と考えられる焼土坑1基 (SX 12) を検出した。
- SX 11 SX 11 は幅2.2 m、長さ8.0 mの地山整形遺構で、床面には一部焼けた部分が存在する。
- SX 13 SX 13 は幅1.3 m、長さ5.8 mの地山整形遺構である。SX 11 のすぐ上方に存在する。
- SX 12 SX 12 は幅1.1 m、長さ1.9 mで、等高線と並行して造られた南北方向に長い焼土坑である。北側の短辺に長さ25 cmの突出部を持つ。削平を受け残りは良くないが、埋土中には炭が充填し、床面は良く焼けている。遺物は出土していないが、同様の形状をした焼土坑

fig. 188 SB 01 全景

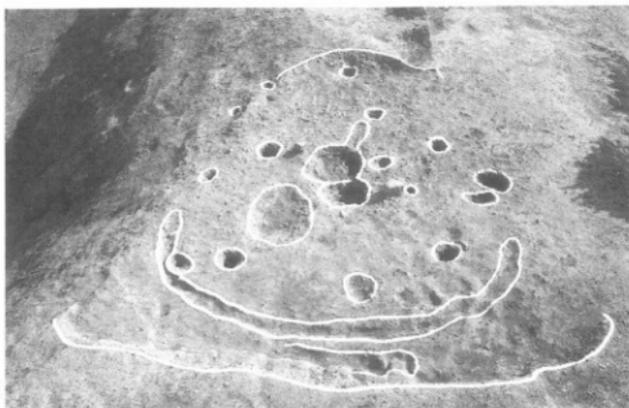


fig. 189 SB 02 全景

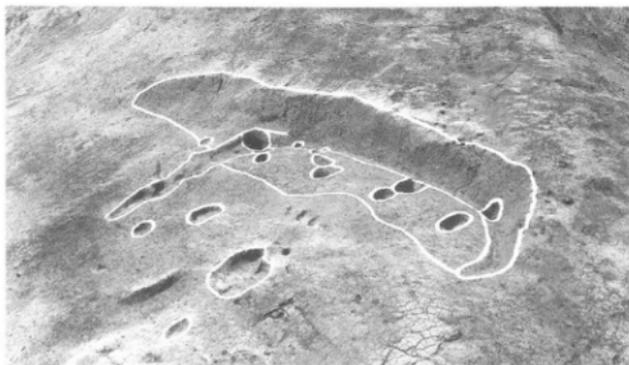
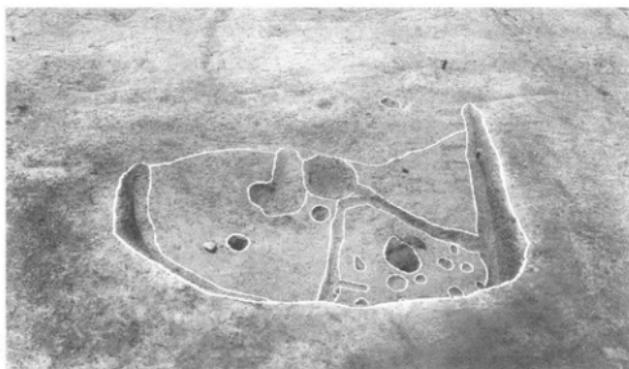


fig. 190 SB 04 全景



は明石川流域で多く発見されており、この土坑もそれらと同時期の、中世の焼土坑と考えられる。

南区南斜面 南区南斜面では、弥生時代中期後半の土坑4基（SK 05～08）、中世と考えられる焼土坑3基（SX 14・15・17）、同じく中世の不定形の土坑（SX 16）、時期不明の溝2条を検出した。SX 14・15・17はSX 12と同じく、突出部を持つ長方形の焼土坑である。

- SX 14 SX 14は幅1.7 m、長さ4.7 mで、等高線に直行して造られた南北方向に長い焼土坑である。北側の短辺に突出部を持つ。
- SX 15 SX 15は幅1.4 m、長さ4.3 mで、等高線に並行して造られた東西方向に長い焼土坑である。西側の短辺に小さな突出部を持つが、他の焼土坑の突出部は長さが約20cm以上で、床面より掘り窪められ、炭が充満しているのに対して、この遺構の突出部の形状は、壁が僅かに張り出しているのみなので、他の焼土坑の突出部とは機能の違うものと思われる。後述する近接したSX 17が東側に突出部を持つことから、このSX 15は東側短辺付近の床面の隆起が突出部に代わる構造のものと考えられる。
- SX 17 SX 17は幅1.5 m、長さ3.3 mで、等高線に並行して造られた東西方向に長い焼土坑である。東側の短辺に長さ60cmの突出部を持つ。SX 15に近接し、並行して造られていることからこの2基の土坑は同時期に造られたものと考えられる。
- SX 16 SX 16は幅1.4 m、長さ2.4 m、深さ30cmの長方形の土坑に幅60cm、深さ60cmの断面V字型の溝状の遺構が接続した遺構である。土坑からは遺物はほとんど出土していないが、溝状遺構には炭が詰まっており、底から須恵器碗の破片が出土している。

3. まとめ

今回の調査で当遺跡の保存区域外の調査は全て完了した。今回調査したD地区では、主な遺構として、弥生時代中期後半の建物6棟と地山整形遺構4基、中世の焼土坑6基などを検出した。

弥生時代の遺構は、主に北区に集中しており、南区では散在的に存在するのみである。建物6棟の内、4棟が堅穴住居と考えられ、他の2棟は平地建物または高床建物と考えられる。今回の調査区内での建物の配置は、尾根上には1棟で他の5棟は斜面に造られている。堅穴住居は水平距離で約40m間隔で造られており、その間に平地建物または高床建物と考えられる建物が造られている。

弥生時代の遺物としては土器類のほか、柱状片刃石斧4点、偏平片刃石斧1点とサヌカイトの大型割器が数点出土していることが特徴的である。石庖丁・太型始刃石斧等は出土していない。また石錘2点と飯蛸壺1点が出土していることから、丘陵上の遺跡でありながら、漁撈との関わりも今後考える必要がある。また住居内や流土中から砥石が多く出土していることも特徴的なことといえる。

中世の焼土坑は全部で6基見つかった。これらの焼土坑は、標高75m付近に造られているという共通性があるが、形状的には2種類に分けられる。SX 01・02はよく似た形状の焼土坑で炭焼窯の可能性もある。SX 12・14・15・17は突出部を持つ長方形の焼土坑で、これまで明石川流域の中世遺跡で多くみつまっている。この焼土坑の性格も今のところ明確でなく、初めて丘陵上で見つかったことで、今後この遺構の性格を考える上での手掛りになるものと思われる。

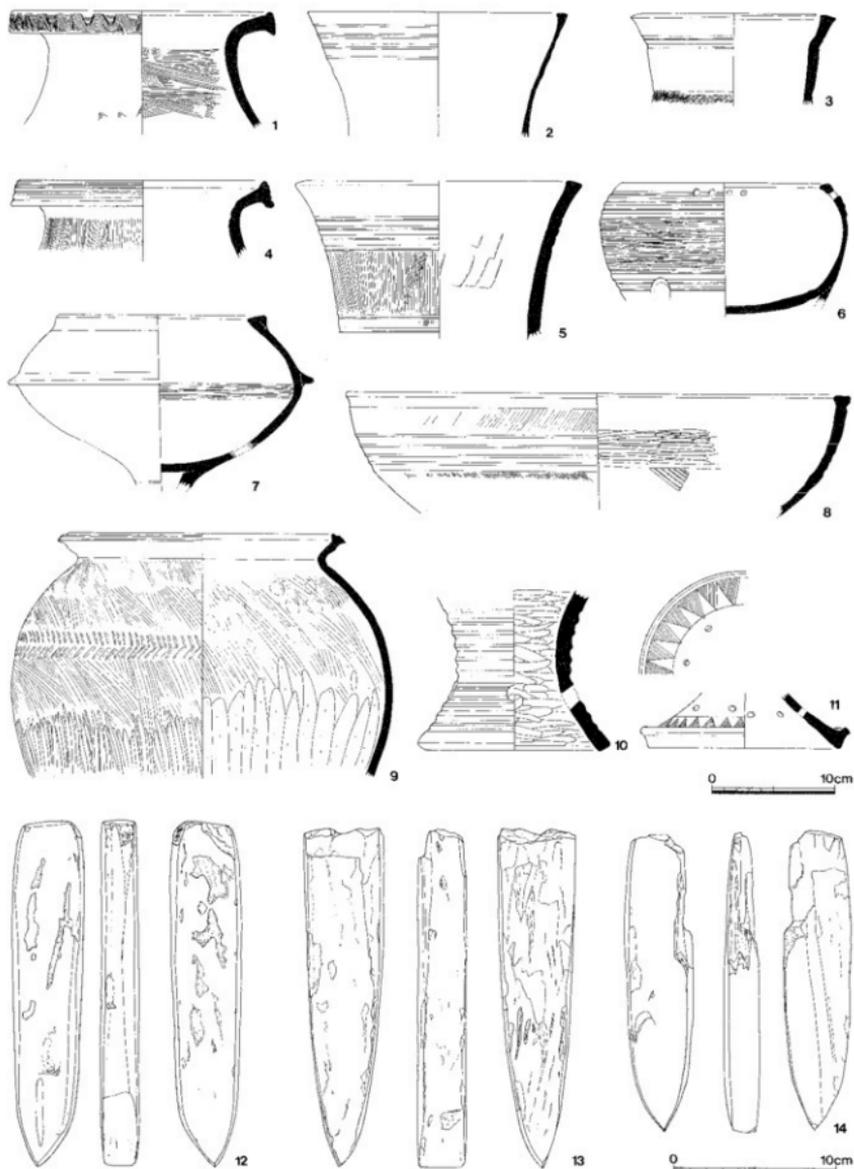


fig. 191 北地区出土土器・石器実測図

Ⅲ. 平成4年度の大規模試掘調査

概 要

神戸市では、各種開発・造成工事に伴い、埋蔵文化財の存否を確認する試掘調査を実施している。主として、住宅建設等に伴う小規模な試掘調査は、今年度は208件であった。それ以外に、大規模な地形改変を伴うものとして、土地区画整理事業および土地改良事業（圃場整備）があり、毎年広範な地域で試掘調査を実施している。これらの試掘調査によって、新たに発見される遺跡があるのはもちろんであるが、周知の遺跡でも、その範囲内での遺構の状況等が明確になり、遺跡のより詳細な内容が把握できるようになってきている。

平成4年度に実施した大規模土地改変に伴う試掘調査は、土地区画整理事業に伴うものとして西区高津橋土地区画整理事業、土地改良事業に伴うものとして北区八多地区、西畑・深谷地区、淡河地区、西区菅野地区、松本地区、平野地区の各土地改良事業がある。

試掘調査は、基本的に平面2mの方形で設定し、バック・ホーないしは人力により遺物包含層上面ないしは遺構面直上まで掘削し、その後、平・断面の精査を行っている。また、必要に応じてトレンチ調査で確認している場合もある。

大規模試掘調査一覧

事業名	遺跡名	試掘坑数	試掘面積	試掘調査結果
八多地区土地改良事業	上小名田 吉尾	303	1,212㎡	中世遺物包含層・遺構
西畑・深谷地区土地改良事業	西畑 深谷	111	430	中世遺物包含層
淡河地区土地改良事業（中山地区）	中山	119	476	中世遺物包含層・柱穴
◇（東畑地区）	東畑	132	520	中世前期遺物包含層・遺構
◇（北畑地区）	北畑	160	640	中世前期遺物包含層
◇（本津地区）	淡河本津	157	770	中世後期遺物包含層・鉄滓
◇（萩原地区）	萩原城	103	460	中世遺物包含層・柱穴
◇（本町地区）	奥	44	170	弥生・平安時代遺物包含層
菅野地区土地改良事業	菅野	134	536	中世遺物包含層
松本地区土地改良事業	松本	89	356	時期不詳遺構
平野地区土地改良事業	玉津・田中	184	736	弥生時代水田・集落址
高津橋土地区画整理事業	今津	22	88	弥生・古墳・中世遺物包含層

凡例



試掘調査対象範囲



試掘調査地点



遺跡存在範囲

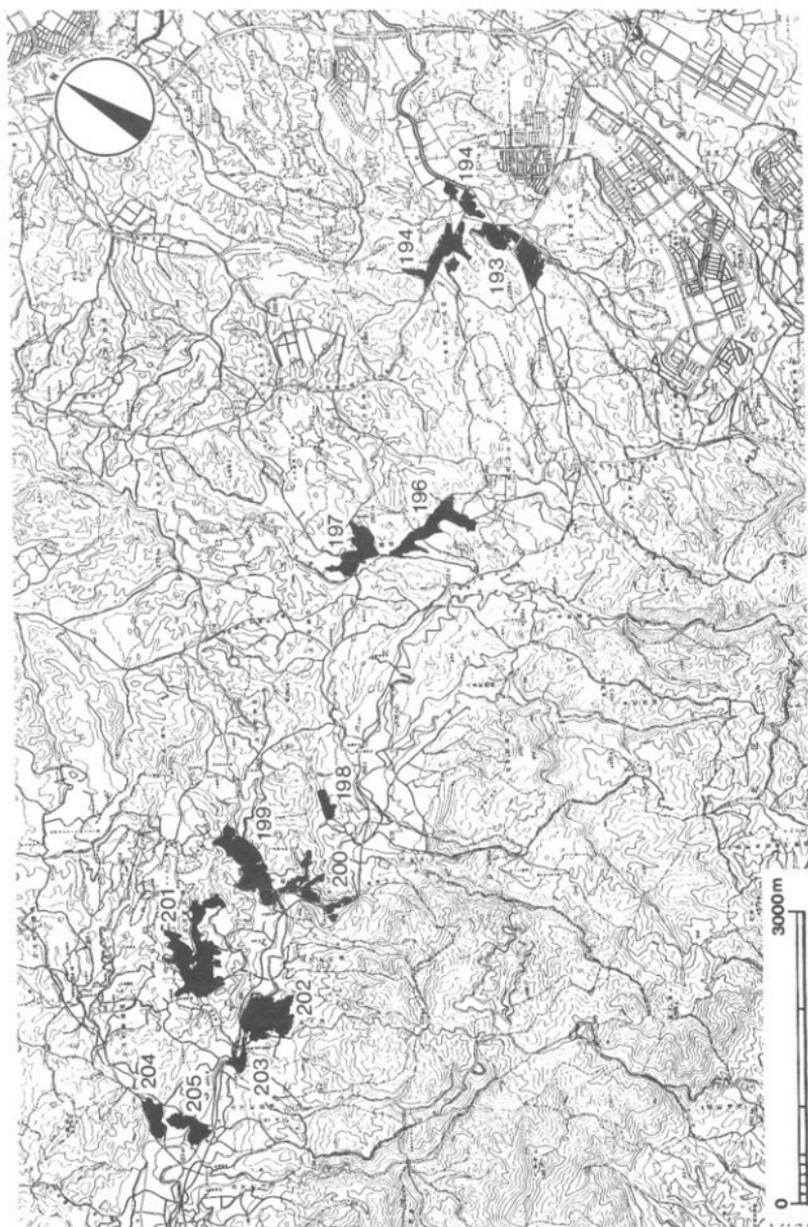


fig. 192 北区試驗地城全体図

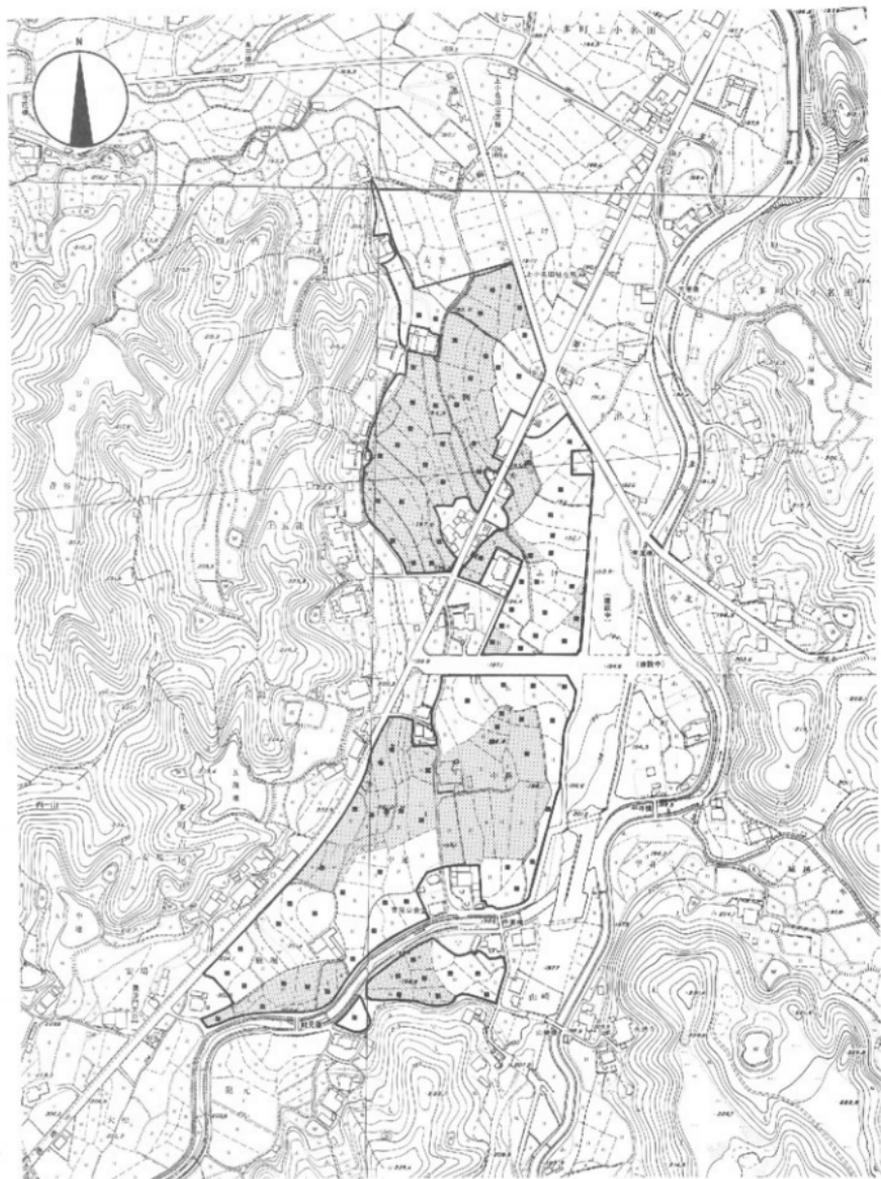


fig. 193 八多地区试掘调查地点 (S=1/5000)